**地方創生フォーラムin福島**

**『地方創生のカギ～地域が真に再生するためには～』**

日時：平成27年7月10日（金）

場所：会津大学　講堂

１．挨拶

主催者挨拶

内堀雅雄（福島県知事）（代読　鈴木正晃副知事）

　　　椎川忍（一般財団法人地域活性化センター理事長）

　　歓迎挨拶

　　　室井照平（会津若松市長）

【司会】

お待たせいたしました。ただいまより、福島県、一般財団法人地域活性化センター共催、総務省、会津若松市、福島県市町村振興協会、福島県市長会、福島県町村会、朝日新聞社、読売新聞社、毎日新聞社、日本経済新聞社、産経新聞社、福島民報社、福島民友新聞社、地域づくり団体全国協議会後援の、「地方創生フォーラムin福島　地方創生のカギ～地域が真に再生するためには～」を開催いたします。私は、本日の司会進行を務めさせていただきます荒井恵美と申します。どうぞよろしくお願いいたします。はじめに、主催者を代表いたしまして、福島県知事より、皆様に御挨拶申し上げます。

【鈴木副知事（代読）】

皆さんこんにちは。福島県副知事の鈴木と申します。本日は内堀知事に代わりまして、ご挨拶をさせていただきます。本日は大変お忙しい中、地方創生フォーラムにご参加をいただき、誠にありがとうございます。また、本フォーラムの開催に当たりご尽力をいただきました地域活性化センターの皆様、エクスカーションを主催されました会津若松市の皆様に、この場をお借りし厚く御礼申し上げます。全国各地で将来にわたっての人口減少問題の克服と成長力の確保を目指し、地方創生に向けた取組が活発化しております。福島県では、震災以降、若い世代の首都圏への流出などにより、人口減少に拍車がかかっており、これに歯止めをかけ、地域を元気に活性化していくことは、震災からの復興と併せて、福島県に課せられた使命であると考えております。このため、人口の将来を展望する人口ビジョンと、具体的施策を盛り込んだ総合戦略を本年秋に策定することとしておりまして、現在、福島県地域創生人口減少対策有識者会議において、熱心なご議論をいただいているところであります。本日のフォーラムでは、大南先生から基調講演をいただきますとともに、後半のパネルディスカッションでは、有識者会議で座長を務めていただいております岡崎先生をはじめ、すばらしい御見識をお持ちの5名の方々に御出席をいただきます。ご登壇いただく皆様には、お忙しい中、出席をご快諾いただきまして誠にありがとうございました。本日は、活発な御議論を通して、全国各地における地方創生の先進的な取組や、将来を見据えた地域づくりなどの御提言をいただけるものと期待をしております。結びに、このフォーラムが実り多いものとなりますとともに、御参会の皆様の益々の御活躍を祈念し、御挨拶といたします。平成27年7月10日、福島県知事内堀雅雄代読。本日は誠にありがとうございます。

【司会】

鈴木副知事でした。続きまして、一般財団法人地域活性化センター理事長の椎川忍より皆様に御挨拶を申し上げます。

【椎川理事長】

皆さんこんにちは。ただいま御紹介いただきました椎川と申します。本日はお忙しい中に、このように大勢の方に地方創生フォーラムin福島に参加をいただきまして誠にありがとうございます。心から厚く御礼申し上げたいと思います。さて私たち地域活性化センター、ご存じない方も非常に多いので、私たちも今地域活性化センターの未来構想と物語づくり、そしてコミュニティーづくりというものを始めております。３０年前に発足をいたしまして、福島県会津若松市さんはもちろんでございますけれども、ほとんど全ての自治体に御協力をいただき、あるいは民間企業からも御支援をいただいて、地域活性化に取り組んで参りました。これまで、活力あふれ、個性豊かな地域社会を実現するために、各地で展開されるさまざまな地域活性化の活動のお手伝いをしてきたところであります。特に私たちの役割は、地域を支える人材の育成、これは最も重要なことだと考えて人材育成に取り組んでまいりました。さらに、国のように大きな事業を展開して、インフラを整備し、あるいは企業誘致をしたりしてやっていくということではないので、私たちはコミュニティレベルの小さな細胞を元気にする、コミュニティレベルの課題を一緒になって解決してそれを横で繋いで連携をしていく、そういうことを主眼に進めてまいりました。今日のフォーラムは、そのような視点に立ちまして、私たちの極めて重要な事業の一つとして、福島県さんの共催も得てやっていくものでございます。答えは縦にはなくて横にあるというのが私の考え方でございます。ぜひとも色んなことを感じていただいて、お気づきいただいて、しかし成功にはパターンはないと言われてるんですね。失敗にはパターンがあると言われております。これは経営学の基本なんですね。ですから地域経営も全く同じ事で、失敗にはパターンがありますから失敗から回避をするということは簡単に学べるんですけれども、成功は色んな要素が重なって成功しているケースが多いので、これをよくよく見たり勉強しないとエッセンスが分かりません。表面的なことだけ見て、例えば、今日おいでになっている神山町の大南さんのところの近くに上勝町ってありますよね、葉っぱビジネスで有名な。葉っぱビジネスで上勝町が成功したから葉っぱ売ったってもうダメなんですよね、現実にそういうことが起きております。ですから、なぜ上勝町で葉っぱビジネスが成功したのか、地域の土壌や、或いはそれに取り組む課程の苦労話、或いは失敗をしながら成功に最後はたどり着いているんですね、どこも。ですから本当は失敗談のようなものも学んだ方が良いとも思ったりもするわけでございます。今日は先ほどご紹介いただきましたＮＰＯ法人グリーンバレー理事長大南信也様、神山ですね、サテライトオフィスで有名な。知らない方はおいでにならないと思います。実は私たちも9月16日から18日にかけて神山町の現地で地方創生実践塾というものを3日間、みっちり、表面的なことだけではなくて、現実にそこに移住をしてきた人たち、或いはそこで、サテライトオフィスで働きながら東京に帰ったり大阪に帰ったりしている人たちの話も実際に聞いて、体感をしてもらうという塾をやる予定をしております。ぜひ、ちょっと遠いですけれども、大南さんは今日遠くから来てくれたわけですから、皆さん方もぜひ、もしご興味あれば神山町にお出かけいただけるとありがたいと思います。私も実は大南さんとは何度もお話をしていますが現地に行ったことがないので、ぜひ9月16日にはお邪魔したいと思っております。それから、地域づくり、地域活性化では第一人者の法政大学の名誉教授の岡﨑昌之先生、福島県でも色々と活動をされているようです。大いに参考になるのではないかと思います。それから、里山資本主義というものを皆さんお聞きになったことがおありになると思いますが、その番組を作られた井上恭介さんです。現在ＮＨＫエンタープライズのエグゼクティブディレクターということで、たまたま先ほどお伺いしたら今日本が出たそうですから、多分お話の中で紹介いただけると思いますが、私も実は楽しみにしております。私たちの土日集中セミナーでも井上さん、藻谷浩介君、それから、銘健工業の中島社長ですね、ＣＬＴを政府に先駆けて開発をされ、一生懸命取り組んでおられる。このお三方にセミナーをやっていただいたりしておりまして、本当に感謝を申し上げております。そういった素晴らしい皆さん方、他にもお二方登壇をしていただきますけれども、お話をいただけるわけで、きっと皆さんの何かこれからの地方創生の取組の参考にしていただけるだろうという風に自負を持って今日の企画をした次第でございます。ぜひ、熱心にご聴講いただきまして、或いはまた人脈づくりも大事ですから、もしこの人とつながりたいということがあれば終了後に名刺交換などしていただいて、ぜひ繋がっていただきたいと思います。最後になりましたけれども、フォーラムの開催に当たり多大な御協力をいただきました福島県、会津若松市の皆様に厚く御礼を申し上げまして、本フォーラムが開催地やお集まりの皆様の地元の地方創生の取組に少しでもお役に立ちますことを祈念いたしまして私の御挨拶とさせていただきたいと思います。私たちも、福島県、そして会津地域の地方創生の取組に注目させていただいて、何かお手伝いができることがあれば、今後お手伝いをさせていただきたいと、こういうことを申し上げまして、挨拶に代えさせていただきます。本日はご苦労様です。ありがとうございました。

【司会】

椎川理事長でした。続きまして、歓迎挨拶といたしまして、会津若松市長の室井照平より御挨拶申し上げます。

【室井市長】

皆様、こんにちは。会津若松市長の室井照平でございます。ここ、会津若松市において、福島県内はもちろんでありますけれども、全国から多数の皆様をお迎えし、「地方創生フォーラムin福島」がこのように盛大に開催できますこと、地元市長として大変嬉しく思います。市民を代表いたしまして心より歓迎を申し上げたいと思います。また本フォーラム開催にご尽力をいただきました一般財団法人地域活性化センター、並びに福島県はじめ関係された皆様方に厚く御礼を存じ上げたいと思います。今の我が国の状況でございますが、少子高齢化・人口減少の真っ只中にあります。ただ、様々な課題を解決すべく、それぞれ抜本的な解決を目指して、魅力ある地方都市をつくろうということで今取組が始まっている訳であります。会津若松市においても、古くからあります漆器や酒などの伝統的な地場産業に加え、先端技術関連産業の集積であったり、さらにここ会津大学でございますけれども、ここを核とした産学官連携によるＩＴベンチャー企業の創出などにより独自の地域経済の発展に努めてきたところでありますが、残念ながら、やはり東日本大震災そして原発事故による地域産業への影響はまだ残っているところでありますし、特に若年層の人口流出が止まらないという状況が大きな課題となっております。このような中、まち・ひと・しごと創生法の施行を踏まえ、今年4月に会津若松市まち・ひと・しごと創生人口ビジョンに加えて会津若松市まち・ひと・しごと総合戦略を策定いたしました。地域資源であったり、地域特性を活かすということで、少子高齢化・人口減少社会に対応した時代の流れに沿った新たな産業の集積や雇用創出など地方創生に向けた各種施策に取り組んでいるところであります。さらに来週月曜日になりますけれども、その推進体制を構築するために、「産官学金労言」と言われておりますが、各界より多くの方にご参加いただきまして会津若松市まち・ひと・しごと創生包括連携協議会を発足させる運びとなっております。これにより継続的な施策の推進・評価・改善に取り組み、地方創生の実効性を高めて参りたいと考えております。現在我が国では国を挙げて人口減少の克服と地方創生を成し遂げようとする各地域においても、そういう工夫を凝らした様々な取組み、先ほども申し上げましたが行われております。本日のこのフォーラムを契機とした、そうした各地域の取組がより一層活発化していくことを心より念願する次第でございます。会津若松市、お城のあるまちでございますけれども、天守閣が再建されて今年でちょうど50年という節目の年でございます。23年には赤瓦に改修させていただきましたし、また観光地でもございます。ぜひお時間があれば、許す限り観光をしていただければと思っているところであります。結びになりますが、本フォーラムのご盛会を心より祈念申し上げまして歓迎の御挨拶とさせていただきます。本日は誠におめでとうございます。

２．基調講演

　　「創造的過疎」による地方創生

　　大南信也（ＮＰＯ法人グリーンバレー理事長）

【司会】

　室井市長でした。鈴木副知事と室井市長は公務のためここで退室させていただきます。それでは、基調講演へと移らせていただきます。ご講演いただきますのは、ＮＰＯ法人グリーンバレー理事長の大南信也様です。大南様は90年代初頭よりアートや環境を柱に地域と世界を繋ぎ、グローバルな視点での地域活性化を展開されておられます。現在は、ＮＰＯ法人グリーンバレー理事長としてＩＴベンチャー企業のサテライトオフィス誘致による雇用の創出などに取り組まれていらっしゃいます。本日は、「創造的過疎による地方創生」と題しましてご講演いただきます。それでは、大南様にご登場頂きましょう。皆様、拍手でお迎えください。

【大南氏】

　皆さんこんにちは。徳島県神山町から参りましたＮＰＯ法人グリーンバレーの理事長をやっております大南信也と申します。恥ずかしながら私福島県を訪れるのが初めてですみません。新幹線で通ったことはありますが、初めてです。あまり徳島と福島と関係ないかと言うとそうでもありません。第一次世界大戦中に松江豊寿と言われる陸軍中佐、会津出身ですよね、その方が後に第9代の若松市長になられたんですよね。その方が第二次世界大戦中に徳島にある板東俘虜収容所と言って第一次世界大戦でドイツ人の俘虜が沢山徳島に移され千人ぐらいの収容所ができました。その時に所長をされたのが松江豊寿さんです。非常に考え方がフラットな人で、俘虜も全く差別することなく自由に活動をさせました。収容所の中に色んな店をオープンさせたりとか。結果的に徳島はベートーベンの第九のアジア初の初演の地になります。なぜかというと、松江所長が後押しをしてくれたわけですよね。さらに、2年前に大河ドラマ「八重の桜」というのがありましたよね。冒頭のオープニングタイトルバックに、磐梯山をバックに会津の子供たちがピンクの和傘を差すシーンがあったと思います。あのタイトルバックを作られた菱川勢一さん、ドローイングアンドマニュアルの社長さんです。実は、ドローイングアンドマニュアルは神山にサテライトオフィスを置いています。だから少しは関係があるなと思ってやって来ました。私の本業はNPOの理事長ではなく、建設業、コンクリート製造業です。公共工事で飯を食ってきた人間です。今から25年くらい前に、仲間と一緒に町がもう少し面白くならないかワクワクするような町ができないかと思い、少しずつ地域づくりの活動に入ってきました。石の上に3年という言葉がありますけれども、仲間と一緒に石の上に25年も座り続けていたら、最近になるとつくづく感じます、自分たちの体温だけでも、冷たかった石も神山の石も温まってくるもんだなと。それで、今神山で少し色々な現象や結果が見えているのだと思います。毎日毎週沢山の方が視察に来られ、その現象や結果を見られるわけです。ところが、現象や結果には経過やプロセスがあります。実は視察に関して一番重要なのはそのプロセスや経過を見つめることです。つまり、今サテライトオフィスが神山でうまくいっているからうちの町でもサテライトオフィスを作ってやろうと短絡的になぞったのではうまくいかないのではないかと思います。今日は1時間いただきましたので、グリーンバレーがどのようにして生まれ、何をやってきて、今現在何をやって将来何を目指すのかという辺りをお話ししたいと思います。これからスライドを使いながら説明させていただきます。

まず創造的過疎という言葉を今から8年くらい前に作りました。では創造的過疎とは何かということです。2007年2008年あたりを境に日本の人口が減少し始めています。そうだとすれば、神山のような今まで人口失ってきた地域においては、これを止める、或いは増加させるということはもう考えるべきではないと思います。そうした一方で、今まで人口の問題というのは数で捉えていた地域が多いかと思います。減ることを受け入れた中では、数ではなくて、内容を改善していこうというのがこの考え方です。外部から若者やクリエイティブな人材を誘致することで人口構成の健全化を図り、或いは神山のような中山間のまちであれば今まで農林業だよねということで色んな産業政策が行われてきましたが、うまく回っているような地域は少ない気がします。そこでガラリと発想を変えて、多様な働き方ができるビジネスの場としての価値を高め、農林業だけに頼らない、バランスの取れた持続可能な地域ができないかというのがこの考え方です。日本の過疎地、地方には大きな課題があります。雇用がない、仕事がないということです。そのために若者がふるさとに帰ってこられない、移住者を呼び込めない、結果的に後継人材が育たないという現象です。この辺りを解決するために神山では、神山プロジェクトというものをいくつか走らせています。

一つ目、サテライトオフィス。場所を選ばない働き方が可能な企業を誘致することによって、神山に育った子達が、ああいう職種に就けば自分たちも帰って来られるんだというメニューを提示していくことが必要だと思います。そうすることによって、地域における世代間の循環というのを少しずつ取り戻していく必要があります。ところがその世代循環が今日本の地方、田舎では非常にか細いものになっています。だからそれだけに頼っていても地域は持続しないということだと思います。当然移住者を迎える必要がありますが、雇用がない仕事がないから移住者を迎え入れられないという問題があります。その問題を解決するためにワーク・イン・レジデンスというプロジェクトを作りました。これは、もし地域に雇用がない、仕事がないのであれば、仕事を持った移住者を受け入れることによってこれが解決できるのではないかという考え方です。さらに、神山塾。職業訓練などをグリーンバレーで積極的にやることによって後継人材の育成を図ろうというものです。

徳島県神山町、60年前の1955年に町が生まれました。当時の人口2万1千。ところが現在6千人を切り、今も順調に人口は減っています。こういう町が最近少し全国的に注目を浴びているのは、社会動態人口ですよね。過疎の町なのでずっと転出数が転入数を上回ってきました。今から7，8年前に百人強も出て行く人達が多かったわけです。2007年に神山町移住交流支援センターが置かれました。この運営を、神山町の場合は役場ではなく、グリーンバレー、民間の団体に任されたわけです。その後数値が改善をしていきます。それで2011年度に初めて社会増になったわけです。そのまま社会増続いていけば格好良いんだけれどもまた社会減になります。ところがこのマイナスの数です。何もやってなかった時は百以上のマイナスでした。明らかに数値が改善をしてきています。さらに、創造的過疎の考え方では、数ではなく内容を見ていこうということです。この期間、移住交流支援センター経由の移住者を分析していきます。58世帯105名。うち子ども27名。緑の丸は大人の数、黄色の丸は子どもの数です。だいたい出身地も表しています。東京周辺からは①の数字が並んでます。単身者が圧倒的に多いということを示しています。全体の大きな特徴は、移住者の平均年齢が30歳前後です。非常に若い層の人達が入って来ているから、多少の社会減が起きても、町の力、活力は失われてないのではないかという考え方です。

それとともに、ＩＴベンチャー企業などが12社今サテライトオフィスを置いています。神山の地理的な条件ですよね。東京から来るとすれば羽田から飛行機で60分、そこから車で60分で神山に到着します。一番最近の例だと、東京の国際特許事務所がサテライトオフィスを置きました。この後会計事務所や法律事務所、さらに小さなファンドを扱ってくれるような事務所が拠点を構えるようになれば、起業、インキュべーションの場として機能し始めるのではないかと思います。また、徳島大学では、サテライトオフィス神山学舎を開設し、神山で学部生或いは大学院生向けに授業も始まっています。こうした動きが、5月27日に、アメリカのワシントンポストに取り上げられました。トップ紙面と第八面に結構大きな取扱いで載せてくれたわけです。その中で、アメリカで言えばポートランドのような町ですよという紹介がされていました。非常に過分な、誇張された表現だと思いますが、この東京支局長が神山を訪れたときに、ポートランドで流れているような同じ空気を感じられたのではないかと思います。

では、こういう動きは何から始まったのかという話をします。スタートは一体の人形です。1927年にアメリカから日本に送られてきた友好親善の人形。青い目の人形と呼ばれています。当時日米関係が非常に険悪だったので、子どもの世代から日米関係を育んで改善していこうという動きが起り、アメリカで１セント募金が行われ、日本の子ども達に人形を送る運動が始まりました。結果的に12,739の人形が仕立てられ、1927年、昭和2年の2月に横浜の港に着きます。受け取った文部省は人形を全国の小学校や幼稚園に配布していきます。非常に珍しい人形だったので大歓迎されます。ところが1941年に太平洋戦争が始まると逆にキャンペーンの対象となります。敵国から送られてきた人形だから焼いてしまえ壊してしまえとほとんどの人形が壊されてしまいます。今現存しているのは全国で約320体です。そのうちの1体アリスジョンソンという人形が、私の母校神山町神領小学校に残っていたというところから話は進んでいきます。ではなぜこの小学校に残っていたのか、当時神領小学校の教師だった阿部みつえ先生が「人形に罪はないから」ということで木箱に人形を入れて用務員室の戸棚の奥深くに隠したわけです。だから結果的に残ったということです。1990年になると、私の長男が小学校へ行き始めます。それでＰＴＡの会合で十何年かぶりくらいに小学校を訪れると、廊下にこの人形が飾られていました。校長先生に色々と見せてもらっていると、人形がパスポートを持っていたわけです。そこには出身地が書かれていました。ペンシルベニア州ウィルキンスバーグという町の名前です。63年前に送られてきた人形です。もし10歳の女の子が送ってくれたとすればその人は73歳。まだ生きておられるかも分からないという思いの中で、この人形を誰が送ってくれたのか探し出してやろうとと考えて、ウィルキンスバーグ市長宛で手紙を書き、送り主探しを依頼します。そうすると、半年後の1990年の暮れに、見つかりましたという連絡が入ります。見つかったわけだから、人形は一度神山にお嫁に来たのと同じわけですから人形を里帰りさせようということで、アリス里帰り推進委員会というものをつくります。五ヶ月後、30人の町民の訪問団を結成してこの人形一体をアメリカに連れ帰ったというのがそもそもこのグリーンバレーのスタートになります。このときに、五人くらいの、後にグリーンバレーの中心になるようなメンバーが同じこの成功体験をしていたというのが大きかったと思います。もし私だけがこの里帰りに参加していたとすれば、帰ってきて自分の言葉で仲間に説明します。「どうだった？」「とにかく面白かった！」って、通じないわけですよね。ところが、この五人の一緒に行った仲間の中では、「あのときとにかく」という話で通じるということです。地域づくりやまちづくりにおいて、まずは、複数の人間、できれば五人くらいの人間が同じ成功体験を共有する、その意識を共有するということからスタートするのではないかと思います。翌年になると、このアリスの会はミッションを終えたので神山町国際交流協会に衣替えをします。そして人形できっかけができたから、人形をもう少し掘り下げていけば、神山を何かワクワクさせるような町にできるのではないかと、人形のことで色々仕掛けていきます。ところが、2年経っても3年経ってもあまり変わってこないわけです。せっかくいい材料見つけたと思ったのにうちの町は何も動いていかないのかなと思っていたときに、転機が1997年に訪れます。徳島県が新長期計画を発表しました。その中で、神山を中心とした地域に「とくしま国際文化村」をつくるという、当時の徳島新聞にわずか3行の記事が載ったわけです。この記事を見たときに、国際交流協会のメンバーで話し合ったことは、これから十年後二十年後を考えたときに、県や市町村が作った施設であっても必ず住民自身が管理運営するような時代が来るだろうということ。そうだとすれば、与えられたものであればうまく運営できるはずないから、自分たちはこういう国際文化村が必要だということを徳島県に提案をしていこうという動きを始めました。この辺りから色んなことが少しずつ変わってきたような気がします。これ以前の神山では、例えばイベントやプロジェクトを続けていれば、その向こう側に何かが見えてくるだろうという予報で動いていたわけです。ところが結果的に見えてこなかったということです。この時から、まず十年後二十年後の町の姿を思い浮かべたということです。そこから逆算して現在に下ろしてきて、今何をやらなければならないのかを考え始めたということです。つまりまちを見る立ち位置が、今までは現在からばかり見ていたけれども、未来から見始めたら違う姿が見えてきましたよということだと思います。そこで、国際文化村委員会を立ち上げます。25名くらいの民間の委員会ですが、5名くらいの役場の企画の人達にも入ってもらいました。そこからいくつかのプロジェクトが巣立っていき、最終的にそれらを統括運営するためにグリーンバレーが誕生したということです。

ところが、国際文化村委員会を開いたときに困ったことが起きます。困ったことが起きたと言うよりは困った人がこの会合に現れるわけです。アイディアキラーです。アイディアキラーとは過去の失敗を例に挙げながらアイディアを破壊する人。会合や組織にも必ず1割5分から2割くらい素質を持った人がいます。何をやるのかというと、誰かが一つアイディアを言います、するとアイディアキラーが立ち上がって、「あなたが言うことは5年前にでてきていた。そのときうまく行かなかった。」また違う人がアイディアを言います。すると「あなたが言うことは3年前にでてきた。あのときだめだったのはお金がない予算がないということでだめだった。」とにかく出てくるアイディアを自分たちの過去の失敗に照らし合わせて結果論で否定していく人。これは結構効き目があります。なぜかというと、過去の失敗を自分たちは共有しているわけですよね。その傷口に改めてスポットライト当てて、だからダメなんだ結果は出ていると言われたら妙に納得せざるを得ないということです。アイディアキラーにはある種の特徴があります。二言目に言う言葉です。「難しい・無理だ・できない」これでいいアイディアをつぶしていきます。アイディアキラーは会社にも現れます。今日来られている会社以外に現れるとこういう言葉になります。「俺は聞いてない。誰が責任を取る。」またこれ行政にも現れます。福島県や総務省以外の行政にこのアイディアキラー現れると、「前例がない」という言葉でいいアイディアをつぶしていきます。普通人間は前例がないことに直面したら困ったなと考えます。なぜ困るのか、前例がないからそれに対処するマニュアルがないということです。こういうときはこうしなさいということが示されてないということです。ところが前例がないことは困ったなではなく、時代の歯車を回すチャンスが自分に巡ってきたと考えるべきだと思います。なぜかというと、この前例のないことを静かに長時間ずっと観察していたら、いつか誰かが必ず前例を作っています。そうだとすれば、目の前に現れた人がなぜこの前例を自分自身で作っていかないのか、ということだと思います。この前例のないことに前例が生まれたら、またアイディアキラーは口を開きます。「俺最初から分かっていた」と言うんですよね。分かっていたのならなぜ最初からやらないのかという話だと思います。またアイディアキラーは組織や会社や行政だけに現れるのかというと、そうでもないです。私たちの心の中にもアイディアキラーはいます。例えば地域づくりを考えるときに、神山や上勝は特別だという話をする人がいます。自分の町は山奥だから島だから雪国だからおたくの場所とは条件が違うというわけです。これを吐いた時点で可能性ゼロです。なぜでしょうか。この山奥であること島であること雪国であることを自分たちの力で変えられるかの問題です。絶対に人間の力では変えられません。変えられないことは今更議論しても仕方ない、受け入れる以外にないということだと思います。

では、アイディアキラーが色んな局面に出てきたらやはりやっつける必要があります。やっつける方法です。グリーンバレーでは二つの言葉を使いました。一つは、「出来ない理由より出来る方法を考える」です。もしその方法が見つかったら「とにかくやってしまう」。「出来ない理由より出来る方法」というのは単なるものの見方だけです。同じものを見たときに最初からできないと決めつけるのか、できないできないと思っているけれども何か出来る方法があるはずだと考えるのか、結果は全く違ってきます。人間はオープンで開放的に考えたらいいアイディア浮かびます。ところがダメだダメだと閉塞し始めたら絶対に良いアイディアは浮かばないということです。仮に、もしその方法・アイディアが浮かんだとしてもそのままにしておいては何も変化がありません。とにかくやってしまうということです。この「とにかく始めろ」という言葉の英語の原語は「Just do it.」。これを徳島弁に翻訳すると、「やったらええんちゃうん」という言葉になります。これはグリーンバレーで共有されている考え方です。「やったらええんちゃうん」。同じような言葉を話した人がいます。例えば、サントリーの創始者の鳥井信治郎さんあるいは松下幸之助さん。何と言いましたか、「やってみなはれ」です。だから明治も大正も昭和も平成も物事の真理は変わらないのだと思います。とにかく何かを見つけた人、何かを起こした人は必ず行動しているということだと思います。

さて、国際文化村を考える中で、環境と芸術と二つの柱を立てようということになりました。環境については、アダプトプログラム、アメリカ生まれの道路清掃活動です。アメリカで非常に効果を発揮しているけれども、日本ではどこでもやられていない。このプログラムを神山で初めてスタートさせることによって、道路にゴミが落ちていないということをひとつの文化の表現にしていこうと始動します。芸術については、国際芸術家村をつくろうということ~~話~~になりました。大きな変化を起こしたのはこのアートのプログラムです。1999年に始めました。今年で17年目を迎えます。日本人1名外国人2名の芸術家を神山に招待し、その人達が作品を作っていきます。その支援を住民としてやっていこうというプログラムです。このような形で毎年作品が残されて行くので、結果的に、今アートウォークのようなものが自然と形成されつつあります。1つだけ作品を解説します。「隠された図書館」というものがこの山の中にできました。一番近い集落は上角商店街で、道の駅や或いは神山温泉などがある場所です。そこから、距離的に600メートルくらい離れた場所、軽四トラックがようやくすり抜けられるような道を上がってきたらこの図書館に着きます。ではなぜこの図書館ができたかということです。神山町には図書館がありませんでした。そこでアーティストが作品で図書館を作ったのです。借りるのではなく預ける図書館。神山町民であれば人生で影響を受けた本を1人3冊まで収められますという図書館です。ちょっと掘っ立て小屋っぽいですが、違う角度から見たらのっぽで格好良いです。中に入ると今少しずつ本が並び始めています。神山町民や神山町で働いている人であれば、例えば、卒業、退職、結婚の時に読んでいた本、或いは自分の人生に影響を与えた本を1人3冊まで寄付できますという図書館です。本を収めると1個の鍵がもらえます。普通図書館はパブリックなので誰でも入ることができますが、ここは本を収めた人だけが鍵をもらえ、鍵を持っている人だけが利用可能な図書館ということになります。そうすれば、この図書館内が40年後50年後どういう空間になっているでしょうか。神山町民の想いのいっぱい詰まった図書館が出来上がっているはずです。私は62歳です。20年経てば82歳でほぼ平均寿命を迎えます。仮に40年後50年後に図書館が本で満たされるとすれば、しかし、自分達がずっと収め続けなければ40年後50年後の姿もないということだと思います。地域づくりとはこういうことだと思います。普通人間は、自分が起こしたアクションのリアクションを早く知りたいわけですよね、結果を知りたい。だから拙速に色んなものを作っていって、粗いものを作ってしまうわけです。ところがその時間軸をもう少し長く取れば、自分が見えなくても、次の世代その次の世代の人達がこの完成した図書館を見れば良いという気持ちに立てば、非常に奥行きの深い、広がりのあるものが出来上がるのではないかと思います。

アートによるまちづくりは現在全国的に大流行しています。例えば来年は、第３回瀬戸内国際芸術祭が行われます。その際に、二つの手法があるのかなと思います。ほとんどの自治体等が向かうのは1番目の方法です。見学に来る観光客を呼び込んで、この人達が落としてくれるお金で地域を活性化していくという非常に分かりやすい方法です。ところが、観光客を呼び込もうと思えば、有名なアーティストにきてもらって、その人の名前や作品で誘客するのが手っ取り早いです。ところが、神山のプログラムは２つの大きな弱点を抱えています。1つは、資金が潤沢でないということ。有名な人には来てもらえないということ。それとともに、民間で始めたプログラムなのでアート教育をきちっと受けた人間がいないわけです。ということは、自分たちの組織の中にアートを評価する仕組みを持たずして、無謀にもアートのプログラムを始めたということです。その結果美術館のように自分たちの力でアート自体を高めようと思っても無理です。そこで発想を転換します。自分たちにはアートは高められなくても、アーティストは人間だから高められるのではないかという方向を見るわけです。つまり観光客ではなく、制作に訪れるアーティスト自身をターゲットにします。1つのイメージとして、欧米のアーティストたちが、日本で制作するなら神山だよねと言ってもらえるような場所を作っていこうということです。そのためには、やってきたアーティストの滞在の満足度を上げていく必要があります。ちょうど神山には四国88カ所の12番札所焼山寺というお寺があります。11番から12番、12番から13番に至る道が、遍路道になってそこを行き交うお遍路さんに対して、古来、お接待の風習が今も色濃く残っているわけです。そのお接待の文化でアーティスト達を柔らかく包むことによって満足度を上げようというような方策をとります。このプログラムを7年8年続ける中で、そろそろ愛好会、同好会的なアートのプログラムからビジネスが生まれないかという方向を模索し始めます。すでに神山に自主滞在し始めるアーティストが出てき始めていたので、そういう人達に対して、宿泊やアトリエのサービスを有償提供することによってビジネスを生み出そうというものです。ビジネス展開しようと思えば当然、情報発信が重要になってきます。そこで、ウェブサイトを作ろうという話になりました。2007年から8年にかけて総務省のモデル事業をもらって、「イン神山」というサイトを作ります。制作を手伝ってもらったデザイナーが西村佳哲さんで、現在神山に移住してきています。さらに、トム・ヴィンセントさんというイギリス人です。当然、アートでビジネスを興していこうとうことなので、アート関連の記事を一生懸命作り込んでいきます。これらが一番よく読まれるだろうという想定の下で。ところが2008年の6月4日、サイトが公開されると、意外なことが起こります。一番よく読まれるのがアートの記事ではなく「神山で暮らす」だったのです。「神山で暮らす」は神山の空き家物件情報です。この家は2万円で借りられますよとか、この家は傷みが激しいから薪ストーブを入れても大家さん許してくれますよといった情報が他のコンテンツの5倍から10倍くらいよく読まれるということが分かりました。これまで神山はほぼIターン者がいなかった町でした。ところが、インターネットにこの物件情報の小窓が開いたことによって、ここから、神山に対する移住需要が顕在化してきました。

では、これまでの神山の移住の歩みというものを振り返ってみます。1999年にアートのプログラムを始める前は、ほぼIターン者がいなかった町です。私の知る限り、1980年代初頭に陶芸家夫妻と画家夫妻がやってきただけです。ところが、アートのプログラムを始めたことによって、その2，3年後から毎年ぽつりぽつりと招待されたアーティスト達が神山に移住し始めました。こういう人達に対して、空き家探し、或いは大家さんとの交渉、さらには引っ越しのお手伝い等をグリーンバレーでやっているうちにグリーンバレーに移住支援のノウハウが少しずつ蓄積されていくわけです。それで、2005年になると神山町全体に光ファイバー網が完備しました。高速インターネット回線がここで使えるようになったのです。じゃあこれを活用して、ウェブサイトを作ろうよということになったけれども、ちょうどその間、2007年10月に神山町移住交流支援センターが置かれたわけです。当時、日本の国には2007年問題というものがあったと思います。2007年になると、団塊の世代が退職を迎えるということです。彼らを地方に迎え入れることによって、活性化を図ろうという動きが全国の道府県で起こりました。徳島県も同様の動きの中で、移住希望者に対して移住のワンストップサービスを提供しようということで、移住交流支援センターを県内各市町村に置くという徳島県の方針が示されました。結果的に、8つの市町村に設置されたのですが、神山町以外の7つの市町村は全て市役所、町役場、村役場の中に置きましたが、神山の場合だけ、「グリーンバレーさんはこれまでアーティストの移住のお世話やってるから、役場がやるよりもうまくいくはずだから委託運営してください」という話になりました。このときに、グリーンバレーが得たものは移住希望者の個人情報が個々でつかめるようになったということです。この情報を得たことによって色んなことが展開をしていきます。

まず、「神山で暮らす」の中にワーク・イン・レジデンスという規格を仕組んでありました。ワーク・イン・レジデンスは、地域に雇用、仕事がないのであれば、仕事を持った人に移住してきてもらおうという考え方です。元々神山側で編みだしたものではなく、デザイナーの西村佳哲さんのアイディアです。さらにどんな仕事でも町に活力が生まれるわけではないのでもう少し絞り込みす。町の将来に必要と考えられるような働き手や起業家を、空き家を武器にしてピンポイントで逆指名しようという考え方です。例えば、この家には、神山に石窯で焼くパン屋さんがないからパン屋さんをオープンする人だけに、同様に、このインターネットの時代になったのにウェブデザイナーがいない、でも絶対町の将来には必要だ、じゃあこの家はウェブデザイナーだけに貸し出しますよということで最初から入り口を絞ってしまうということです。このように、移住の前に職種を特定・限定できることによって、今度は、町をデザインできるということに繋がっていきます。そこで1955年の上角商店街の地図を取り出してきます。当時ここでは38のお店が商売をしていました。ところが、その後徳島市内への道路アクセスが良くなり、さらに市内周辺に量販店、スーパーなどができるにつれて、段々と、買い物客が流出をしていき、商店街が寂れていきます。200８年６月このワーク・イン・レジデンスを始める前には、道の駅が出来たり神山温泉がリニューアルされたにも関わらず、38あったお店は6軒まで減っていました。ここに先ほどのワーク・イン・レジデンスで呼び込んできた人達を埋めていこうという作業をし始めます。するとワーク・イン・レジデンスを商店街に連続的、継続的に適用していけば、住民がこんな商店街を作りたいというものを、ほとんどコストもかけずにマッチングだけで理想の商店街が出来るのではないかと思い込み始めます。

そこで、グリーンバレーが一歩足を踏み出し、オフィスイン神山という空き家改修の事業を始めます。2軒繋がりの長屋の一角を、グリーンバレーで借りて、外装内装水回りなどを改修する事業です。これには、地域活性化センターから200万円の助成金をいただき、グリーンバレーも200万円を投資して、計400万円で改修を進めていきます。これまで神山には、アーティストが循環する場所はあったわけです。神山アーティストインレジデンス。秋になったら2ヶ月半ほど、やってきています。ところが、アーティストが移住してきてくれても、仕事がないので、続いていかないわけですよ。移住が定着しないという問題がありました。そこで、もう少しアーティストよりもビジネス寄りの人達、例えばクリエイター、グラフィックデザイナー、映像作家、カメラマンみたいな人だったら、神山でも生活が続けられるのではないか。そういう人達が滞在、循環できるような場所を作ろうというものでした。この改修工事では、東京芸大の建築学科の学生、院生、助手、或いは首都圏の建築系の学生達が2010年の夏休みに延べ250人、ボランティアでこの改修工事を手伝ってくれます。このような形で改修が進んでいき、出来上がります。完成したオフィスを借りてくれたのは、トムヴィンセントさんです。ブルーベアオフィス神山という名前が付けられました。実は神山で今起こっているサテライトオフィスの動きは、先ほどのこの空き家改修のプロセスの中で生まれていきます。神山に視察に来られる人で、事前にあまり勉強してきてない人は、神山はサテライトオフィスというアイディアをシリコンバレーかどこかで見つけてきて神山にサテライトオフィスを作ったんでしょと考えられている方多いです。いや、サテライトオフィスという言葉も知らなかったのです。では何が起こったかということです。

2010年3月と6月に、当時ニューヨークに滞在していた2人の建築家が帰国することになりました。一方で、グリーンバレーではオフィスイン神山の事業が始動し始めていましたが、これまで空き家改修の事業をやったことなかったので建築家と繋がっていませんでした。だからちょうどこの子達がニューヨークから帰国することになり、たまたま板東君とは2008年頃から知り合いになっていたので、帰国するならオフィスイン神山の事業を一緒にやろうという提案をしたら、ぜひやらせてくださいということになりました。それで、設計ができ、模型などができるわけです。そこに、トム・ヴィンセントさんから神山にオフィスを置きたいというメールが入って来ます。では、完成したものをトムさんのオフィスにしようということで、ブルーベアオフィス神山として改修が進んでいきます。このオフィスがほぼ完成に近づいた2010年9月下旬、須磨さんの慶応時代の同期で神山に初めてサテライトオフィスを置いた名刺管理の会社Sansanの寺田社長が須磨さんから神山の話を聞くわけです。寺田さんは慶応卒業後三井物産に就職をし、2000年から2001年にシリコンバレーでの滞在を経験します。この人はずっと物産で働く気はなく、いつかは起業しようと考えていたわけですよね。起業した暁にはシリコンバレーのような自由な雰囲気の中でがっつりと社員を働かせたいという思いがあったわけです。予定通り2007年5月に物産を退社し、6月にSansanという会社を起業します。その会社のミッションが、「ビジネスの出会いを資産に変え働き方を革新する」でした。同級生の須磨さんから神山の話が流れてきます。神山は四国の山の中にあるので自然がいっぱいで、非常にオープンな住民が住んでいて、光ファイバー網が全戸に配備されていてネットの速度がめちゃくちゃ速いというのです。それで、2010年9月26日、27日に1泊2日で神山にやってきます。即断即決です。20日も経たない10月14日には、Sansanの社員3名がこの古民家で仕事を始めていたというのが神山におけるサテライトオフィスの始まりです。だからサテライトオフィスというアイディアを神山で実現したのではなく、神山に入ってくる建築家、クリエイター、デザイナー、さらにはITベンチャー企業の起業家などの思いやアイディアを一緒になって実現していたらサテライトオフィスが生えて来たということだと思います。自生してきた。だから非常に据わりの良いものが出来上がっています。このような動きが、テレビの映像として流されるわけです。1枚の画像だけで、神山町の運命を変えてしまったと言っても過言ではないです。

では、企業はどのような場所で仕事をしているのでしょうか。これはSansanのサテライトオフィスです。このような場所は福島にもいくらでもあるはずです。こういう古民家、空き家がオフィスになる可能性が出てきているということだと思います。内側に入ると、こんな感じで仕事をやっています。向こうに見えるモニターは東京本社の模様です。テレビ会議が多用されています。屋内での仕事に疲れたら外に出ます。また、単身者だけではなく、子どもさんや奥さんを連れた社員の滞在も実現しています。新入社員の研修も神山でやっています。さらに、元々サテライトオフィスはプログラマーやエンジニアのためという風に考えられていましたが、やり始めると色んなことが起こってくる。今では営業の人達が神山で仕事をすることもあります。営業が神山のような山の中でできるということになれば、日本の働き方がガラリと変わってくる可能性があるのではないかと思います。最初にサテライトオフィスがこの神山に展開し始めた時、マスコミも含めて、サテライトオフィスは本社の人間が二週間とか1ヶ月ぐるぐる循環するだけだから、地域に落ちるのは、例えば飲食のお金くらいしかないという風に見られていました。ところがやり始めてみると色んなことが起こってきます。もうすでに本社の人間が神山に移住し常駐者として働いていたり、さらには、開発拠点化というのを進めているので、ここで新たな雇用が生まれようとしています。また平成26年度の神山町の法人税収のうちの約7％は、サテライトオフィス関係だったらしいです。田舎町なので法人税収自体があまりたいしたことないけれども、このサテライトの展開がなければその7％もなかったということです。冒頭で申し上げたドローイングアンドマニュアルは菱川勢一さんが社長です。NTTドコモの森の木琴あるいはJR東日本の東京駅復元等のCMを作った人です。八重の桜のオープニングタイトルバックも菱川さんの作品です。ドローイングは神山にオフィスを置いています。これがあのオシャレな会社ドローイングの神山のサテライトオフィスです。これ菱川さんが自分で見つけてきました。家賃2万円。地域に住んでいる私たちは絶対に勧めない物件です。ここまで傷んでいたら、オフィスにする企業はないだろうと考えてしまいます。ところが菱川さん自身が見つけてきたわけです。ここで重要なことは何かと言えば、こういった物の価値判断を自分たちだけの目線で下してはいけないということです。相手にゆだねるということだと思います。これが非常に重要なポイントです。ドローイングの人達は何をやりたいかということです。仮にこれが比較的新しい家であれば、家主さんから必ず内装を変えないでとか改装しないでという条件が付きます。ところが、傷んだ古い家であれば家主さんも何も言いませんよね。自由にして良いよと。その自由にして良いということが、ドローイングアンドマニュアルのような尖ったクリエイターたちを惹き付けるということになります。

次に、プラットイーズという会社が非常に面白い動きをしています。テレビ番組の番組情報（メタデータ）を放送局に配信するという事業をしています。2012年11月にこの古民家を手に入れました。2013年1月から6月末にかけて改修を進めます。現在はこんな「えんがわオフィス」というものが出来上がっています。違う角度から見たらこんな感じです。向こうに見える蔵もオフィスになっています。夜になるとこんな感じになっています。外は古民家ですが、内側に入ったら結構最先端です。番組情報の会社なので、テレビのモニターなんかが20台くらい並んでいます。ここでは20名くらいの雇用が発生しています。何が大きいかと言えば、若者にとって魅力的な職業が誕生したということだと思います。神山にも職が全くないわけではないですよね。神山温泉で働く、椎茸組合で働くということもあるんだけれども、若い人達が魅力的に感じる職場というのは、日本の地方、過疎地には圧倒的に少ないということです。だからこういうものができたというのは非常に大きいかなと思います。さらに、この会社は今年3月に新たにアーカイブ棟を建てました。ここではスーパーハイビジョン映像の編集、保存の事業が行われています。４Ｋ、８Ｋという話を聞くようになったと思います。東京オリンピックも８Ｋで放送されます。４Ｋ、８Ｋまでなると一つの番組のデータ量が２テラや３テラになるそうです。だからハードディスクで持ち運ぶということはできないので、必ずサーバを備えたこのような保存する場が必要になってくるらしいです。こういう場は、今現在日本では、東京だけにしかないそうです。日本で2カ所目のそういった編集が出来る場がここに誕生したということです。ここでは、これから数年後に、数十名のエンジニアが働くような職場が誕生します。これに対して、神山町役場がいくら誘致のために費用を使ったでしょうか、全くゼロです。全く予算を使っていません。でも、このような企業は来てくれているということです。

なぜでしょうか。Sansan寺田社長にしてもプラットイーズ隅田会長にしてもこの人達がやりたいのは、イノベーションを起こしたいわけです。今までなかったようなものを生み出したい。そして彼らは知っているわけです。イノベーションは、お金で起こせないということを。だから優遇策には反応しないということです。彼らはイノベーションには場が必要だということを知っているのだと思います。そのイノベーションを起こす場として神山がこの人達から認知されているから何のインセンティブを提示しなくても来てくれているということだと思います。えんがわオフィスの斜め前に2013年12月、ビストロがオープンしました。これもワーク・イン・レジデンスによる飲食店の誘致です。元々ここの通りは神山一の商店街でしたが、顧客は町内の人に偏っていました。だから人口減少、過疎化と共にたちいかなくなります。役場が近くにあるにもかかわらず、食事する場所もコーヒー飲む場所もゼロになってしまいました。そのため地域住民からグリーンバレーに、来客があっても食事する場所がない。飲食店を誘致してよという話が持ち込まれていました。そこで、預かっていた元酒屋の物件をネットに掲載し、最適者を二年間待ち続けていると、アップルコンピューターに勤めていた女性が買ってくれて、○千万円の投資をして、ビストロに変えてしまったということです。地域の人たちは、飲食店を誘致してという話だったので、セルフのうどん屋ぐらいを想像していたと思いますが、いきなり山の中にビストロができてしまいました。非常に繁盛しています。料理もおいしいです。ここでは、毎月「みんなでごはん」というイベントが行われています。この日は、兵庫県笹山市から６人、東京から8名、さらに地域に住んでいる人、サテライトとして働いている人が一堂に会するような場です。場自体が、異業種交流の場になっているということです。こういう場で出てきたアイディアがはじけて、色んな面白いことが起こっていくことになりますやはり町には、人の情報が行き交う場というのが必要になってきます。道の駅で得られるのは地図情報です。道の駅に欠けているのは、人の情報だと思います。だからスポットでポーンと視察にやってきて、自分の興味のある、関心のある事、人に繋いでくれる場が必要になってくるわけですね。スライドの商店街図で、灰色に塗りつぶしてあるのが４年前までは空き家、空き店舗だった場所です。ここにワーク・イン・レジデンスでオフィスやクリエイター、アルチザンなんかを集積しています。映像作家が入ってきたり、鎌倉からサテライトオフィス、映画の予告屋、プラット・イーズ、ビストロ。1月15日には、オーダーメイドの靴屋さんもできました。ここも繁盛しています。このように人の流れの途絶えていた場所に新たな人の流れや循環が生まれてきます。このような循環生み出した人、さらに周辺に住む人たちにとって次はどんな職種の人に入ってきてもらえればこの町がもっと躍動していくのかを考えて、空き家や空き店舗を埋めていけば、ここだけにしかない商店街が出来上がるはずです。こういう商店街はバイパス商店街に対してでも競争力を持つのではないかと思います。ある意味でテーマパークみたいな商店街ですよね。コワーキングのスペースも作っています。神山バレー・サテライトオフィス・コンプレックス。もともと縫製工場だった場所に、神山町、徳島県、グリーンバレーが300万円のお金を出して、コワーキングオフィスに改修したものです。ここをサテライトオフィスとして使っている企業もあります。さらに東京の企業の合宿などにも使われています。20人ぐらいで神山に合宿してここで仕事をするという感じです。

ところが、合宿している人たちから宿舎とこの場所が離れすぎているというクレームが出てきます。神山は公共交通機関が発達していないから、雨が降ったら3キロも歩けないという話です。この問題が7月1日に解決しました。オフィスのすぐ横にある築90年の古民家に、総務省からもお金をいただいて、ビジネス客用のロッジが完成しました。こんな感じです。「ウィーク神山」と名付けられました。ここで面白いのは、民間で新会社を設立しましたが、資本金のうち50％は神山町役場及び町民50名が出資しています。ここで目指しているのはお金の地産地消です。地域にあるタンス預金を銀行に預金しないで地域内で回していこうというモデル事業でもあります。神山町産のヒノキや杉が多用されています。元々あった母屋は、食堂棟になって甦りました。部屋から見ると眺めも良く、非常に環境の良い場所です。ここでは、毎日日替わりシェフがやってきて、毎日違う料理が出されます。今年9月には地域活性化センターの地域活性化塾が行われる際にはここで宿泊するようになると思います。またここでは、オーガニック野菜を基調とした地産地消のメニューが考えられています。

次は、神山塾です。人材育成事業。6ヶ月間の厚労省の職業訓練です。やってくるのは独身女性で20代後半から30代前半、東京周辺の出身、クリエイター系の子達が圧倒的に多いです。デザインが出来たり編集が出来たりカメラワーク上手みたいな子達がやってくるわけです。2010年12月にスタートしました。6期で77名が修了していきました。うち半数が、そのまま移住者として神山に残っています。だから、神山でいま起きている変化の2割か3割はこの子達が作りだしているのだと思います。例えて言うと、神山は人口6000人の町です。地域おこし協力隊が5名います。それに加えて、民間版の地域おこし協力隊が30数名いるというイメージです。人口6000人の町で、40人の地域おこし協力隊を擁する町は、日本中を探してもどこにもありません。その子達が自分のやりたいことを実現していく中で色んなことが起こっていきます。移住した子達の中から、10名くらいはサテライトオフィス或いはその関連事業で雇用をされています。出口を持った職業訓練はオールマイティですよね。さらに、グリーンバレーとしては、人材育成で職業訓練を一生懸命やっているのですが、カップルが10組誕生して赤ちゃんも5人生まれています。婚活にもなっていて厚労省注目の事業なっています。

さて、少しまとめに入っていきます。芸術文化による地域創生で、神山に何が起こったのかという話です。まずは1999年に現代アートを持ってきました。地域の人達は「あんな訳の分からないことをやっても何もならないのに」と結構冷めた目で見ます。ところが、何もならないと思われるようなことであっても、5年10年15年続けていたら価値を生んでいくということです。神山に魅力が生まれます。町に魅力が生まれると必ず起こることがあります。人の集積が始まるということです。このようなクリエイティブな人の、人が人を呼ぶ現象、そしてその連鎖と循環です。それとともに、今まで住んでいた人と新しく入って来た人との間で知恵と経験の融合が起きてきます。そこから新しい物品などが生まれ始めています。今日まで地域創生や地域再生を考えるときに一番重要なのは地域資源であり、それを掘り起こして何かの物を作るという手法が取られてきたかと思います。そこに「何」があるかということに注目していたんですよね。それも非常に重要ですが、これから必要なのは、そこにどんな人が集まるかということではないかと思います。そして集まった「人」から、「何」は生まれると考えた方が今の神山で起こっている現象は説明しやすいと思います。

ではどういうことが起っているのでしょうか。移住者がビストロをオープンさせました。ここで出されるパンは、建築家の移住者が焼いた有機小麦のパンです。ここで出されるコーヒーは、デザイナーさんの奥さんが有機栽培のコーヒーをハンドピックしたもの。ここで出される野菜は、チーノ農園が納めています。元々エンジニアだった人が脱サラして有機栽培の農家さんになっています。またここの野菜は去年7月にオープンした有機小麦のピザ屋さんにも納められています。これらは全て、移住者が起こしてきた動きです。移住者がこれぐらい動き始めると、地域の人達も影響を受けます。40代半ばの元々神山に住んでいた男の人は、いちごやすももを作っていますが、それをジェラートにしてこれらの店に卸しているのです。これらの動きのキーワードは、有機農産物、オーガニックフードだと思います。オーガニックフードを好むような人達の集積循環がすでに起きているということだと思います。ＩＴベンチャーの人達もオーガニックフードが大好きです。例えばアメリカではサンフランシスコから半径100キロ圏内で全米の約90％のオーガニック野菜は作られているらしいです。なぜそこで作られるかと言えば、シリコンバレーやバークレーの辺りにはそういったものを好むＩＴベンチャーのような人達が集まっているからです。

ではもう一度整理してみます。1999年にアートからスタートしました。そうすると最初に起こってきた現象は、2，3年後に、招待したアーティスト達が神山に移り住み始めたということです。それから今度2008年6月からは、ワーク・イン・レジデンスで力を持った起業者を集めていったわけです。すると、今度は移住者だけでなく、ＩＴベンチャー企業やデザイン、映像の会社がサテライトオフィスを置き始めたということです。そして、この新しい塊は元々神山になかった塊です。このような新たな人の流れができたということです。この人の流れが生まれたことによって、今まで神山に成立し得なかったものを成立させ始めたということです。サービス産業を興し始めたのです。ピザ屋さんがうまくいったりビストロがうまくいったりビジネス客用の宿泊施設がここで回り始めるということです。では、これらサービス産業で使われるものは何でしょうか。農産物です。つまり、中山間や地方の本丸である農業に影響を与え始めているということだと思います。普通自治体は、この農業、本丸から攻め落とそうとします。農業をどうにかしないと、というところです。しかし結構攻めあぐねている所が多いような気がします。ところが、グリーンバレーは、農業の知識もテクニックもなかったわけです。神山の農業を見ながら、もう少しうまくいったらいいのにと常に考えていました。でも、自分たちの手の届くところに農業はないと思っていたわけです。だから、違うアートの入り口から入っていきました。ところがここにヒントが隠されていました。アートによって、新たな人の流れが創出されて、それがサービス産業を興して農業をはぐくみ始めたということだと思います。ここまで分かってくればもう少し戦略的に進める必要があるのかなと思います。戦略的に有機栽培の農家さんをワーク・イン・レジデンスで集めることによって、磐石な有機農業の基盤が出来るのではないかと思います。こうして生産されたた野菜は、従来型では全部農産物として出荷され、東京のオーガニックレストランで出されるわけですよね。だから地域に落ちてくるのはこの野菜の代金です。千円、二千円が落ちてくる。これをブランド化しても二千円、三千円の世界だと思います。ところが、東京ではこれにサービスが加わって二万円、三万円の料理に化けていくということだと思います。こういう形も良いんだけれども、地方創生の中ではもう少し違うタイプも考える必要があるかなと思います。これは、地域内で循環を起こしていくということだと思います。だから、サービス産業も福島の中に取り込んで、東京の皆さんが福島の野菜を食べたいのであれば福島にやってきてくださいという話だと思います。これで結構うまく回っているのは、山形県の鶴岡ではないかと思います。奥田シェフが経営されているアル・ケッチァーノという名のイタリアンです。東京の若い女性なんかが山形新幹線に乗って、わざわざ三万円の料理を食べに行っているということですよね。だから、鶴岡でサービスが発生するから鶴岡に雇用も生まれる。ここで地域の経済が回り始めると、次は鶴岡周辺の地野菜を掘り起こしてみようという形で非常にダイナミックな動きが起こっているのではないかと思います。だからこれからこのサービスを地域内にどうやって興していくかということによって、この地方創生のひとつの形というものが見えてくるのではないかなという気がしています。

もう一つは、創造的過疎による地域創生。現在があって未来があるわけですが、未来はぼんやりしています。とくに、過疎の問題はぼんやりとぼやける可能性が強いです。なぜでしょうか、過疎と聞くと人間は感情で捉えたり情緒的に捉える傾向があります。過疎ってかわいそうだよね、困るよねと。言った時点でこれがあいまいなものになりがちです。これを避けるためには、やはり過疎の数値化も必要だと思います。数値化することによってもう少しくっきりした未来を描きだして、そこから現在に向かって逆算して、逆算に乗せて色んな政策を打っていけば、創造的過疎が実現できるのかなと考えています。創造的過疎で一番のポイントは、過疎を止めるということを止めることです。過疎になるのは仕方が無いから受け入れるということです。受け入れた中で、人口構成の健全化を図ったり、或いは働き方や職種の多様化、色んな人達がこの中山間や地方でも働いているという状況を作り上げることによって、結果的に、再生が進んで行くのではないかという気がします。

そして、推計人口のモデルも2008年に作っています。年少人口にターゲットを当てました。2005年の国勢調査に基づいて、何もしなかったら神山の年少人口は2010年に433人、2035年に187人になりますというモデルです。ところが、この年少人口というのが少し曲者です。なぜでしょうか、人間は0歳児から14歳児までの塊をひとつのイメージとして捉えることはできません。イメージ出来ないものが半数以下になるから大変だと言っても、これは市民、町民には伝わらないということです。だからもう少し分かりやすいように数値を加工する必要があります。単純に15で割ってみました。すると、1学年あたりの子どもの数が出てきます。神山町民の皆さん、今神山には1学年に28.9人の子供たちがいます。ところが、皆さんが何も努力をしなければ2035年には1学年12.5人になります。ここで何が起こるのかが明確に町民に共有されます。つまり物事を考えられるデータがここに与えられたということだと思います。ではここで、1学年12.5人の神山でいいですかということです。もう少し欲張りましょう。例えば減るのだけれども、1学年20人の神山を2035年に作りませんかということです。15を掛けると年少人口は300人です。だからここから現在に向かって逆算をします。次はこの逆算に乗せて過疎化を進めていくということです。そこで、4人家族で子ども2人のモデルの子育て世帯というのを考えます。毎年何世帯ずつこの子育て世帯を神山に移住してきてもらえれば良いのかというのを計算で出します。このシミュレーションは徳島大学の人口問題をやられている石田先生にお願いをしました。295≑300です。1学年20人の神山が出来上がるわけです。答えは5世帯20名、うち子ども10名が毎年神山に移住してきてくれれば、ほぼ1学年20人の神山が2035年までに出来上がるということです。

ここで、目標がはっきりしたわけだから、これに対する政策がもう少しクリアになってきます。まずはこの人達が入ってくるための住居が必要です。例えば神山は住居として空き家等を活用していますが、空き家は枯渇する可能性があります。でも、住居の問題はお金で解決できる問題です。例えば過疎債や神山町債を発行して、借金してでも若者定住住宅新築しようと思えば、建てられます。だからこれはあまり問題にする必要はないと思います。ところが、2番目の仕事の問題で日本の地方は全て行き詰まります。若い子どもを連れた移住者を迎え入れたいけれども、うちの町には雇用がない仕事がない、今更工場を呼んできてそこで働いてもらうようなモデルも働かないということです。だからやっぱりだめだよねということになるんだけれども、この問題を何で解決するのかというと、先程から申し上げているワーク・イン・レジデンスかと思います。雇用がない仕事がないのであれば、先ずは仕事を持った人に入って来てもらって、そこで少しずつベースを築いていって、そして色んな職種が成立するような、今の神山のような状況を作っていけばうまくモデルとして働くのではないかと思います。

最後に、「僕の私の好きな場所」について話します。皆さんにも好きな場所有ると思います。ところが、好きな場所を好きなまま置いておいても何も変化がありません。ではどうすれば良いのでしょうか。皆さんは福島大好きですよね。その好きな福島をすてきな福島に変えましょう。難しいですか、案外簡単です。「すてきな」の中にも「すきな」が含まれています。では「すき」に何を加えたら「すてき」になりますか、そうです。「て（~~手~~）」を加えるということです。手を加えるとは、つまり皆さん方が行動を起こすということです。皆さん方が良い方向に行動を起こすことによって、市町村も都道府県も、ひいては日本の国ももっともっとすてきになるのではないかと思います。そして今回私は初めて福島を訪れましたけれども、次回来たときには、今よりもっともっとすてきな福島に出会いたいと思います。だから皆さんもこれから頑張って下さい。どうもありがとうございました。

３．パネルディスカッション

　　「地方創生のカギ～地域が真に再生するためには～」

　　コーディネーター

　　　岡﨑昌之（法政大学名誉教授、福島県地域創生・人口減少対策有識者会議座長）

　　パネリスト

　　　井上恭介（ＮＨＫエンタープライズエグゼクティブプロデューサー）

　　　大南信也（ＮＰＯ法人グリーンバレー理事長）

　　　関元弘（ななくさ農園代表、福島県地域創生・人口減少対策有識者会議委員）

　　　藤田志穂（（一社）全国食の甲子園協会会長、Office G-Revo(株)相談役）

【司会】

お待たせいたしました。ただいまより、パネルディスカッション「地方創生のカギ～地域が真に再生するためには～」を開始いたします。まず、パネリストの皆様をご紹介させていただきます。皆様から向かって一番左にお座りいただいておりますＮＨＫエンタープライズエグゼクティブプロデューサーの井上恭介様です。一般社団法人全国食の甲子園会長、OffiseG-Revo株式会社相談役の藤田志穂様です。ななくさ農園代表で福島県地域創生・人口減少対策有識者会議委員の関元弘様です。ＮＰＯ法人グリーンバレー理事長の大南信也様です。大南様には、基調講演に引き続きご出演いただきます。そして、コーディネーターを務めていただきますのは、法政大学名誉教授で福島県地域創生・人口減少対策有識者会議座長の岡﨑昌之様です。それでは、ここからの進行は岡﨑様にお願いいたします。

【岡﨑氏】

　ご紹介ありましたように、地域創生・人口減少対策有識者会議の座長をさせていただいております。それと同時に、ここ数年間、喜多方市旧高郷村小土山集落や只見町明和地区等におきまして、集落の皆さん方と集落の再生をどうしたらいいか、かなりの頻度で通っております。県の有識者会議を通じて感じますことは、福島県は、海から内陸の会津、そして只見のような多様な、しかも広範囲の面積を有しているということです。それと、11年の大震災による影響を、他の東北或いは茨城等に比べて福島の皆さんは非常に困難な問題を抱えておられる。豊富な自然、資源が現存しながら、それを踏まえて、福島の再生をどうなし得るべきかという問題を皆様とできる限り共有しながら将来を考えていきたいと思っております。

そういう意味で今日は、先ほどの大南さんのお話とともに、3名のパネリストの方に新たな視点も入れて頂きながら、福島の目指すべき方向、ご提言等もいただきながら考えてみたいと思っております。先ほどの大南さんの話、私も感銘深く伺わせていただきました。かなり前ですが、私もアート・イン・レジデンスが始まった頃、町内にレベルの高い野外芸術品が点在しているところを見せていただきました。どことは申しませんが、他の町では、そのように野外の大きな彫刻やオブジェが残念ながら粗大ゴミ的なものになっていた、それが実は正直なところです。それは、アーティストはそれ以降その町に関与しないから、鉄のオブジェは全部錆びてしまうということになっていたのです。神山町の現場を見せていただいて、オブジェに向けて住民の散歩道が整備されていたり、アーティストが持続的に居住している、そういう点で非常に頑張っておられると感じました。

先ほどのお話の中で一番感じた言葉は、「場の価値を高める」という言葉でした。どうやってその場の価値を高めていくのか。元々人間がどこかの集落に住むということはそこに価値を見出したからそこに住みだして集落が育まれていったわけです。日本はそういした10万と言われるような多様な集落がある国です。そういう価値をどうやって再現し、高めていくかがこれから問われていくことになるのではないかと思います。

まずはパネリストの皆さんから、どういうことを今までやってこられたか、今何をやっておられるかについて、お話をしていただけばと思います。最初は井上さんからお願いします。

【井上氏】

　よろしくお願いいたします。今日は、楽しい会にすべしということを伺いましたのでできるだけ皆さんに笑って頂ければと思っておりますけれども、私は今日何をしにきたかと言いますと、今日出た本の宣伝に来ました（笑）。記念すべき今日出版の日でして、会津若松の駅前の本屋さんにもありました。見て参りました。「里海資本論」という本でして、この本は、2年前に地域エコノミストの藻谷浩介さんという方と一緒にずっと1年半くらい番組を作っていた、その方と一緒に出した「里山資本主義」という本が40万部も出ておりまして、売れた本を書いたことないのでびっくりしていますが、この「里山資本主義」からさらに考えを深めたのが「里海資本論」というものでして、そこでやっている考え方、つまりは今まで頭にこびりついていた常識みたいなものをどうやって払うのかということを少しだけ今日皆さんにお話したいと思っております。地域、田舎で暮らせない、食べて行けないということで人口減少すると言っているのは、お金のことばかり考えているからではないかと思います。都会でもお金が稼げて、地域でもお金を稼げて、地域では売り物の農産物がそんなに良い価格では売れなくてという、いつもそんな話になっていますが、だから皆都会で稼いだ方が良いよね、都会に出て行った方が良いよねとなりますが、お金だけのことを言わないで、地域のそこにあるものを活かせないのか、お金に換えないでそのものを使えないのかということを少し考えるだけで、実はその地域にいる方が豊かなんだということに気づいていただきたいというのが「里山資本主義」の考え方です。僕たちがいつも基本にしているグラフみたいなものがありますが、都道府県ごとのいわば貿易収支、赤字・黒字ということを計算してみたものですが、都道府県ごとで、この年はたまたま高知県が一番県ごとの貿易赤字がひどかったということなんですけれども、それがなぜ赤字なのかということを見ていただきたいんですね。石油・電気・ガスは高知県にはないので外から全部買ってきています。これ、こんなにお金払っていたらそれは赤字ですよねという話です。農業や漁業の、色んな農産物もありますしカツオも獲れたりしますから売っていますと言っていますが、飲食料品沢山買っています。これはつまり、生で売って加工して外から持ってきているみたいなものです。ですから、食べていけない、収入が少ないということばかり言っていますが、実は収入以上に支出が多いんだと、そしてこの辺をお金で全て解決しているということ自体を見直せないのかということを言いたいわけです。そして、１番の石油・電気・ガスですね。皆さん残念ながら高知県には油田はありませんとか嘆いておられるわけですが、残念ながら未来にもう油田は発掘されないと思いますが、少し後ろを振り返って高知県の山の方を見てくださいというわけです。山の木がいくらでもあるんじゃないのと、山の木はエネルギーじゃないんですかと、ちっとも使っていませんと。これ未活用の資源というものですね。お金にならないと言って使っていないけれども、本当は使えるのではないかと。そして出来ない理由は皆さん一生懸命仰るんですが、できることから始めようということを言っておられる方の取材を始めました。今度は我々の取材フィールド中国地方の山の方に戻って、過疎中の過疎という場所ですが、広島県の庄原市という所に住んでいる和田芳治さんという方がいまして、ちょうど自宅の裏山です。裏山と言っても100メートルくらい上がったところで木を切っています。エネルギーとしての木の活用を進めているんですね、裏山で。そしてこの日は木を切っていますが、ほんの洗濯かごのようなものを持って30分も歩けば、枝や落ち葉がいくらでもあるわけです。それを使ってエコストーブを、ガソリンスタンドの廃品であるペール缶を使って、煮炊きのものを、熱効率がものすごいというこんなものを使ってここに先ほどの拾ってきた薪をくべまして、ここに釜を置きますと、和田さんが夫婦2人のご飯を20分くらいで、この木の量の1.5倍くらいのもの、原価ゼロ円ですね、それで炊けますということを実践しているわけです。光熱費は、これだけで言うと月に2千円くらい浮きますよと。なんだ月2千円かと言いますが、これだけでエネルギー代全部お金で払ったんじゃないんですかと。もう少し言うと、前の前の時代の電気やガスが通ってなかった時代、ガソリンスタンドが近くになかった時代は、この中国地方辺りはエネルギー全部自給していました。もちろん十分なものはありませんでした。でも、炭を焼いたり、たたら製鉄の場所であったりもしましたので、山城の木を使ってエネルギーにしていた。それが、電気やガスやそういった便利な物ができて、そういう物にお金を払って皆消費者になってしまうわけですね。お金を払って手に入れる。それ以外のものをやるのに、エネルギーのことはエネルギーの専門の方に任してということを言っていますが、では和田さんはそんなに全部のことをエネルギー会社にやってもらわないといけない程忙しいのかと。ものすごく暇です。和田さんのことだけではなく、皆さんも、特に地方に住んでいる方、山里や海里に住んでいる方は生活の周りで自分のできることをやれるということが強みなんですよね、おそらく。しかも、この薪ストーブ、私この間広島から転勤しまして東京都の世田谷区に住んでいますが、僕も毎週やっています。近所にちょっとした公園がありまして、息子と一緒に洗濯かご下げて30分も歩くと、十分薪が拾えます。今競争相手がおりませんのでそのせいもあると思いますが。ですので、やらないことにしているからとか、そんなことは現代人のすることなのかなどと言ってやっていないだけで、実はこうやって炊いた方がご飯はずっとおいしいです。薪で炊いたご飯は、家電量販店で売ってる薪のように炊ける炊飯ジャー、これ和田さんの実例で言うとお友達は8万円くらいで買ったそうですが、それよりもずっとおいしいです。むしろ今は高い技術を使っておいしくないものを食べているのではないかと、これが里山資本主義の考え方の基礎です。ですから、原価ゼロ円で身の回りの物を資源と考え直して使おうじゃないかということです。

そして、もう一言だけ里海資本論を言うと、海だから海のことかと思ったら山のことも言っていまして、つまり、そうやって今まで入らなかった山に人が入っていって手を入れて、今まで鬱そうとして光が差し込まなかったような山を手入れし始めるわけですね。そうすると、山の命のサイクルが回り始めるんですよ。今まで採れなかった山菜が採れるようになる、秋にはキノコが採れ出すと。実はそういった未活用の資源を使っているという第一段階から、そこに人の手が入っていくことによってさらにそこの資源を生み出す資源というものがもっと活性化して僕たちにもっといいものを提供してくれるようになるという、これが里海資本論で言っている、自然に人が手を入れることによってもっと豊かになれるということです。そしてそれは海になるともっとすごいです。実例としては、瀬戸内海、かつてはコンビナートいっぱいになってしまい赤潮の海で遊泳禁止になっていたところが、牡蠣筏（いかだ）だということなんですね、海の中のプランクトンが。そのプランクトンが富栄養化物質と言われる窒素やリンを食べて、でもそれが多すぎて赤潮の原因になっていたわけですが、それを食べてどんどん水を綺麗にしているうちに、いつの間にか海水浴の最も良い場所になってきた。海が綺麗になったらその分だけ、一時期獲れなくなっていた魚も戻ってきたというようなことになると、実は、環境を良くするということは経済も良くするということではないかということなんです。戦後の何十年かは環境を取るか経済を取るかというような時代でした。経済を良くすると必ず自然は犠牲になるというようなことでしたけれども、それがあるところまで行き着いた先には、むしろ自然環境、私たちの身の回りの所に人が手をいれて、人間もそういう所の生き物の一員なわけですから、そこに手を入れて良くして行くと、経済活動、漁業や農業であっても、入って来てより豊かになりますよと。そういう時代に向かって今、歩き始める時代なのではないかという提言をしているのが「里海資本論」でございます。ありがとうございました。

【岡﨑氏】

　ありがとうございました。私も岡山生まれで高校生まで岡山におりましたので、小学校の頃は毎夏、海まで泳ぎに行っておりました。本当に豊かな海でした。山の問題としては、1967年に政府の公式文書の中に初めて「過疎」という言葉が出てくるわけですが、それはまさに中国山地から始まったものです。通常は東北や九州が過疎化の最先端という風に言われ、そう認識しがちですが、実は中国山地だったのです。それほど沿岸部の工業化と山間部の生活が近く、かつ落差もあった。高度成長期という社会的背景もあって、一挙に人々が生活の価値観を変えた、というところから問題が起こってきたと思いますが、井上さん達の取材活動のおかげで、見直しがかなり進み始めたと思います。

それでは続いて藤田さんにお願いいたします。

【藤田氏】

　よろしくお願いします。私も楽しく聞いてもらえたら良いと思いますが、まず自己紹介も兼ねて私が今までやってきた活動を紹介していきたいと思います。私は「ノギャルプロジェクト」という若い人達に少しでも食や農業にまず興味を持ってもらうきっかけを作りたいということをコンセプトに活動を始めました。それが2009年からなので今年で7年目になりますが、その時がこういうかたちで今まで全く食や農業に興味の無い子達に、まず、田植えに行ったり稲刈りに行ったり農作業を体験してもらおうという所から興味を持ってもらおうと活動をしてきました。1年目の田植えの時には雨が降って、皆女の子達は何も知らずにただ田植えをするというだけで来たのに、雨も降っているからすごく寒くて嫌だと言っていたのですが、若い子達の発想の転換と言いますか、途中から誰が一番早く終わるかを競走し出したり、その田んぼに実は裸足で入ると実はミネラルがたっぷりで肌が綺麗になるらしいと農家さんから聞いてすごくやる気を取り戻したりと、普通の農家さんとはまた違った部分で楽しさを見つけてもらって、帰りにはお米を作る大変さが分かりました、もう少しお米を食べようと思いますという声をきくことができました。その中で、秋田県で作っていたのですが、渋谷米というお米を作っていました。なぜ秋田なのに渋谷米なのかと言いますと、まず渋谷の忠犬ハチ公の出身が秋田だということを問合せでメールをいただいて、その時私はやはり若い人達にまず興味を持ってもらうには、若い人の興味のあるものと結びつけなければいけないと思い、渋谷と何かリンクするものがあると良いなと考えている時に、私は忠犬ハチ公がまず柴犬だと思っていたので秋田犬だということにまず衝撃を受け、そして周りの友達にも聞いてみたら知らない子達が沢山いました。なので、秋田で作るけれども、忠犬ハチ公の出身地ということで渋谷米という名前を付けて、お米を5キロのものと、あと隣の物はペットボトルですが、これはお米離れをしている若者に少しでも手に取ってもらいやすいような形はないかなということで、特に女の子達はお米＝炭水化物は太るというイメージが強い中、私はお米マイスターの試験を受けに行ったときにお米＝太ると一概には言えないということを学び若い子に少しでも伝えたいと思い、このペットボトル2合分の小さい物ですが、そのペットボトルの裏に、お米＝太るというわけではないというメッセージとともにバランスが大切だということ、あとはこのペットボトルの形実は女性の上半身の体の形をしています。このペットボトルの名前はそもそもナイスボディというもので、お水を入れて販売されていたりしますが、これにお米を入れて販売すると“ライスボディ”という名前で少し親父ギャグも含めながら若い人に少しでも手にとってもらえるように。さらにこのペットボトル入りのワンハンドのお米は普通にお米屋さんやスーパーではなく、サービスエリアでお土産感覚で買ってもらえるようにしようということでこういった販売の仕方をしたりしていました。その他にも、若い子と言えば、やはりファッションだろうというところから、EDWINさんと作業着をプロデュースし、EDWINは元々海外から作業着として入って来たということを教えてもらったときに、若い人達の中でもジーパンは身近な物であり、そういった物で何か面白いものが作れないかということで、女の子達と農家さんと、あとは農家さんの奥さんとEDWINさんと意見を交換し合って作業着を作りました。本当に普通に外に出るときにでも着られるようにしたいということで、作業着を着ながら実際に私たちも1年間作業をして、携帯をポケットに入れておくと水路に流れてしまったりしたこともあったので絶対にボタンは付けてほしいですとかにおいを抑えられるようにしてほしいですとか、実際に農家さんからしたら高いとか汚れたらもったいないという意見はありましたが、私たちが作りたいのはあくまでもきっかけを作りたいというところだったので、入り口作りということで、この作業着ももちろん、農作業着を売っているところではなくEDWINさんの店舗で普通の洋服と一緒に売って、チラシも置いてこれで作業もできるんだという入り口を作ったりしていました。その他にも、いろいろな作業をしていく中で大人になってからの価値観を変えるのは大変だと何年かやって思いました。確かに、イメージが変わったり、ちゃんとお米を食べるようにしたいとか農家さんの大変さを知れたという声は聞こえましたが、やはりそこから農家になろうとことは、仕事としてはなかなかランキングに入らず、どうしたものかと思ったときに、小さい頃からそういった意識を付けていくことが大切なのではないかと思い、私も世代的にママになる子達も増えてきて、ママになる子達の話を聞いていると子供たちがスーパーでしか物を売っているのを見ないので、魚は切り身で泳いでいるのではないかや、野菜がどうできるのか分かっていないので、少しそういったことを見せてあげたいとか、あとはお母さんの中には、子どもにどんなにいただきます、ごちそうさまを言いなさいと言っても聞いてくれないと。ならばいただきますやごちそうさまの意味を教えてあげたいといった意見もあり、ギャルママツアーという子供たちと一緒に行く、はとバスツアーや収穫ツアーというものは色々とありますが、そうではなく身近なお母さん同士でいろいろな悩み等も相談しながら、行った農家のお母さんに子どもの好き嫌いの直し方を教えて下さいというようなコミュニケーション取ったり、自分たちで収穫した野菜を子どもと一緒に調理するんですね。子どもと一緒に調理することで、普段食べなかったニンジンやピーマンをその時には食べたというような声が聞けたり、小さい頃からそういった経験をさせることが良いのではないかということで、こういったツアーも企画して入り口づくりをしてきました。

その中で今私が一番力を入れているのが「ご当地絶品うまいもん甲子園」という食の企画です。これは今年で第4回目ですが、私は色々なギャルの女の子や子供たちを連れて現場に行ったり、少しでも第一次産業の応援になれば良いと思っていましたが、先ほども言ったとおりなかなか難しいと。農家さんになりたいとか、農家さんに嫁ぐ子達が参加はしてくれましたが、実際農家になろうとか第一次産業に携わろうというのは難しいと思いまして、だとしたらそこに一番近い子達は誰なんだろうと思ったときに、一番最初に思いついたのが農業高校生の子達でした。そこからテレビ番組で農業高校の子達と触れあう機会があり、私の中では農業高校が身近なものでなかったので、どんな子達なんだろうと思っていました。そしたら実はすごくシャイで、話しかけても返事ではなくうなずくくらいしかしない子達だったのに、商品開発を一緒にしたのですが、私もアドバイスをさせてもらいながら地元の食材をもっと活かしたいということで商品開発をしていく中で、熊本の八代高校とハヤシライスを作っていたのですが、回を重ねる毎に地元への熱い思いや作るものに対しての熱い思いがどんどん出てきて、こんなに喋るんだというくらいびっくりしました。あとは私の中のイメージだとやはり過疎化というイメージがあり、若い子達が東京に出たいですとか、東京ではなくても自分たちの県の中でも栄えている所に出たいというイメージが強かったんですが、逆に、こんな今だからこそ自分たちの地元を盛り上げたいという子達がすごく多かったんです。そういった子達を、少しでも背中押しや光を浴びさせてあげて、こう頑張ればこんな良いことがあるんだということを応援できないかと思いこのご当地うまいもん甲子園という企画を立ち上げました。内容は、1年目は農業高校だけでしたが、今年からは農業も水産も商業も普通科も全てを対象にご当地の自分たちの地元の食材何でも良いです、地元のご当地食材を使って高校生ならではのアイディアを取り込んだメニューを開発してもらいます。最初は書類審査を行い、レシピと応募動機、原価表を見て審査を行い、書類審査を通過した学校が予選大会でそのメニューを自分たちで調理し、その後プレゼンテーションをしてもらい高校生ならではのアイディアを競いあう、食の甲子園を今力を入れて行っております。これが去年出たメニューですが、北海道であれば「カレイなるたいやき」というものがあり、水産高校の子達ですが、自分たちが実習で魚を捕りに行くんですが、商品にできない小さいカレイを捨てなければならないのがもったいないので、魚に戻してあげようということで、すり身にしてたいやき器に入れて、すり身のたいやきとして魚の形に戻して人に食べてもらいたいですという話でしたりとか。あとは予選大会ではいわきの平商業高校やいわき農業高校等が出てきていまして、やはり復興しましたと、自分たちの高校がここまで元気になりましたということを世の中の人に伝えたいですとか、そういった色々な思いで学校さんが応募してきてくれています。中には、来年50人学校に来たいという子達がいないと廃校になってしまうので、それを防ぐために応募しましたという切実な思いを持ってやってくれる子達もいます。そういった子達が集まって、服部先生が審査員代表で、さらに今回は茂出木シェフが来てくれたりＡＫＢの子達が来てくれたり、その他にも実食販売、自分たちが考えたメニューをイベントで色んな方に食べてもらう。そして去年は特別枠で書類審査をして台湾の子達に来てもらったりもしました。このような形で、私は基本的には若い子達の応援ということをしていきたいと思っているので、そういった部分を含めて今日はお話をできたら良いなと思っています。よろしくお願いします。

【岡﨑氏】

　ありがとうございました。福井県小浜市は子供たちの食育教育に大変力を入れておられて、市の施設にチャイルドキッチンと名付けて背の低いキッチンを作って、そこで子供たちに料理をさせているのです。それを拝見していると、市の思惑は、子供たちだけでなく、その子供たちのお母さんにきちんと伝えたいということが分かります。そうした点と通じていて非常に面白い試みだと思いました。

【藤田氏】

　子どものためならお母さん普段やらないことでも頑張るんですよね。なのでそういったことも良いきっかけになるのではないかと思います。

【岡﨑氏】

　続いて関さんお願いします。先ほどの大南さんのお話ですと、農業、しかも有機農業は本丸だと結論で出てきましたね。まさに関さんはそれを担ってらっしゃる。よろしくお願いします。

【関氏】

　ありがとうございます。落城するのが本丸なので気をつけなければならないですが。二本松市から参りました、前出のお二方とは違って地元で頑張っている普通の人です。本業は有機農業をやっております。里山資本主義ではなくて里山に住んでいる人ということで、山の資源やら畑の資源を使いながらそれを生業にしております。里山資本主義の本私も愛読しておりまして、地元の方々と一緒に勉強がてらロケットストーブを作ったり、さらには昔の方々のお話を聞いて、昔は里山沢山使っていたんですよね。昭和20年代から30年代の頃の人の話を聞くと、朝4時頃に起きて牛の背中に乗って山行って草刈って持って帰ってきて牛に食わすんだと、そして木は子どもが拾ってきて焚き付けに使うんだよと、よその人の斜面の草刈ったら怒られたと。今では誰も手もかけない、荒れ放題、家の前に白猪森という里山がありますが、そこに今行くと林道だけがかろうじてあるだけで草ぼうぼう倒木がいっぱいなんですが、昔はそこで運動会をやったんだよと、そんなに広いところがあるんですかと、あの一面も木が綺麗になっていて広かったんだと、それが先ほども言ったように場ではなくなってしまったんですね。生活の場でもなければ生業の場でもなくなってしまったら段々人の手が入らなくなって、景観保持のために草は刈るかくらいになってしまって荒れ放題。そして今何とかしたいと思っても残念ながら福島県は里山の除染がされていないから使ってはいけないという状況でなかなか手が出せない状況になっています。これも福島の置かれた特殊な事情で、単に復興だというだけではない難しい部分なんだと思いますが、やっていかなければ場づくりさえも出来なくなってしまうという危機感を持っています。大南先生によれば本丸だそうですが、私も元々は10年前に東京からやってきた人間でございます。農業が農業だけで固まっていたらダメだと思いますし、農家が農家だけの発想で動いてはダメだと、やはり異業種の方と組んで何かしないといけないと思ってやってきましたが、先生のお話を聞いて、やはり農の発想だけなんだ、農業だから何か新規就農者入れて何かさせなきゃいけないと思っていたけれども、違う異業種の方々の経済力を取り込んで、農の活性化をするという逆転の発想は、反省するとともに今後方針転換してやっていかなければと思いました。そして現在は私有機農業をしながら、ただ作るだけではない農業ということで、売り先を意識して、やはり組織的に計画的に出荷していかなければいけないということで、仲間を集めて、農業は出口対策が重要なので、作りっぱなし農業を卒業するためにも出口の方と組んで、そういう流通を含めた仕組みを震災まで作ってきてそれなりに出来ましたが、やはり震災の影響、いわゆる原発ですね、が大きくて、安全安心の有機農産物をなぜ福島は買うのという大きな壁に直面し、我々も、首都圏に向けた活動をいったんは中止して、ならば方向転換だということで震災2，3年目から軸足を地元に移して、内部経済を高めてやろう、地産地消だということで、地元の有機農産物を扱えそうな方々、スーパーチェーンですとか飲食店様をめがけて営業をすると、そしてそれは単にこんな物を作ったから買ってくれではなく、どういう物が欲しいですか、どういう物がいりますか、あとはできればスーパーの販売データをいただきながら逆算で作るような仕組みを今一生懸命仲間とやって、ここ2，3年の努力で今年から転換点に達しまして、何とかなるのではという気がしているところではありますが、やはり農業というものは気候変動も気候リスクもありますし大変なものなのでなかなかすぐには生業にはなりません。私自身も農業だけで完全に食べていけるかというとまだまだ食べていけないところがあります。そういったことを補うために、今流行の農業6次産業化などということで、自身で加工すると。そして、自分で原料を作って人にお願いをするのではなく、自分たちで加工して売るんだけれども、自分たちで楽しんでしまおうということで、私自身は、個人事業でビールまがいの物を作っています。あとは地域全体で6次化をしなければならないということで、地域の仲間とともに震災の年から、耕作放棄地にぶどうを植えてそれをワインにするということで、震災の翌年にはふくしま農家の夢ワインという会社を起こして、一昨年くらいからぶどうが採れ始まって、去年からワインを販売しています。そういった取り組みをしながら、本丸であるんだけれども、周りの部分も強くしながら全体としてがっちりとしたお城を作り、農業だけではないよと、加工もやっているんだよと、全体で農村が楽しめるような自分たちも楽しめるし、都会の方々が楽しめるような仕組みを作って、そこをテコに人を呼び込みながらお金儲けできないかなという取り組みを少しずつ進めています。

さらには、やはり原子力発電所というのは最先端の技術だったはずなのがあのようになってしまうと。やはり最先端のものが必ずしも正しいのではないんだよと、先ほども言いましたように昭和20年代、30年代に現役で頑張っていたご高齢の方々の話をもう一回掘り起こして、それこそ里山資本主義を地でやれるようにということで、学びの場ということで、あぶくま農と暮らし塾という活動もしております。当然農業そのもののことを学ぶだけではなく暮らしということで、自分たちの自給文化を高める、先々月は皆で醤油作りをやってみたり、今年の冬はイノシシを3体くらいいただいて解体実習を行いました。あの地域のあの場が何かしら価値を生むということを皆と共有して、それを単に頭で楽しむのではなく自分で実感して、実践と学びを今一生懸命やっているところであります。

【岡﨑氏】

　関さんどうもありがとうございました。ビールを作っておられるということで、アメリカ等でもマイクロブルワリーが本流ですよね。ドイツでも地元の小さいビール会社が主流です。ドイツの格言に、一番おいしくビールが飲める範囲は、ビール工場には麦を蒸すための煙突が立っているのですが、その煙突の影が出来る範囲だ、というのがあります。元々ビールというのはそういうもののようです。今度行きますので、ぜひおいしいビールを飲ませてください。

三人から現在の取り組み、そこからの主張をお伺いしました。今全国で「地方創生」に取り組んでいますが、政府は、法律も作り、財政的な裏付けもあり、必要であれば人も派遣しようという準備をしています。このような地域政策はなかったのではないかと思うと同時に、ひょっとするとこれが最後ということかも分かりません。こういう時に、それぞれの地域ではどうするか、どう取り組んだら良いのかとについてご発言をいただきたいと思います。今度は大南さんから、この地方創生の視点で、神山から見て全日本に対して言えることをご発言いただければと思います。

【大南氏】

　ちょうど昨日、銀座三越でセミナーがありました。毎月、神山から何人かがが出かけていって、月1回の11回シリーズでグリーンバレーの人間シリーズのようなものをやっています。昨日はたまたまアーティストインレジデンスの提案をした神山の人間と私とでトークをするというような形でしたが、そこで、「話を聞いていたら神山はほとんど民間がやって行政は役割を果たしてないような気がするけれど、それはおかしいのではないですか」という質問が出てきました。僕が逆に考えるのは、行政が全てお膳立てしてくれる方がおかしいのではないかという気がしています。もう少し住民は自分事として捉えていかなければ、今までは結構他人事なんですよね。行政が全部やってくれるはずだと。そしてやってくれなかったら苦情を言い不満を募らせるというパターンが多かったかなと思いますが、とにかく民間でできることって結構あるわけですよね。それを自分事としてやり続けていたら、これまで当然行政がやるべきだと考えられていた所まで範囲が広がって行ったということかなと思います。僕は町や社会が変わるということを次のようにイメージしています。町や社会はひとつの気球です。気球の中で僕らは風船をふくらますようなイメージです。最初は自分たちが手の届かないことでも、やり続けることによって風船が膨らみ、今までできないと思われるようなところまで手が届き始めます。さらに風船を膨らませていると、いつかその風船は社会や町という気球に内接する時がやってきます。この時に内側から風船を押すと、接している気球が凹みます。これが、社会が変わり町が変わるイメージです。したがって自分たちの手届きを広げていって、去年までできなかったことが1年後にできるようになる。また次々にそれが広がって町や社会に自分たちの力が及ぶようになる。他人事として自分たちの人生を行政に全部丸投げし白紙委任することは少し寂しい感じがします。ます自分たちにできることは自分たちでやる。すると行政にしかできないことが見えてくる。そこに行政が歩み寄れば、今までにないような地方創生が生まれるような気がします。

【岡﨑氏】

　ありがとうございました。その風船というのは色んな風船があって良いということですね。大きな気球の中に、民間グループがあったり、ＮＰＯがあったり、住民グループがあったり、そういうのが膨らみながら全体の気球を支えまたその気球自体が上に浮遊していくというようなことが必要だと。そういうことが地方創生に繋がるだというイメージでよろしいですね。

井上さんいかがでしょうか。今これだけ政府も力を入れている、色々な形で機運も高まっているこの時期に、地域の側からはどうコミットメントして行けば良いかという辺りをお願いします。

【井上氏】

　今仰った自分事というのは非常に大事で、もう少し言うと、そこの取り組みやのびしろのようなものがこれ良いなと共通してあるのは、ご自身達が楽しんでいるということなんですよね。または、ご自身達がその地域のことを真顔で自慢しているということなんです。そうでないと全然盛り上がらないし実際に進まないという。何か地域のイベントやっているんだけれども実は2時間くらいで終わってしまって実はダメでしたと言っているところはダメで、本当にそこのものが美味しいよねと言っているのは、売るより前に自分たちで美味しいよねと食べてるところかという、そこのバロメーターに尽きるのかなと思っておりまして、イタリアの田舎みたいなところは大体そういうことになっています。行くと必ず地元のうちのお母さんのピザが一番でみたいな話になっていて、そういうノリでやっている地域は本当に盛り上がっていますし、得てして若い人も帰ってきたりＩターンしてきたりして、実際そこで皆さんが楽しんで作っているものはものすごく美味しいんですよね。野菜もそうです。先ほどアルケッチァ－ノの話にもありましたけれども、島根県で言うと邑南町というところに味蔵というイタリアンレストランがあって、びっくりするようなイタリアンレストランがあるんですが、中に入ると近所の農家やら自分たちの手で耕作放棄地で作った野菜を使ってやっています。ものすごく美味しいです。ただよく考えてみたら当たり前なんですね。都会に持って行ったら1日遅れ2日遅れになっている場合もあるわけなのでそれよりは美味しいんだし、それから自分たちで食べるんだとするとこういう野菜も作りたいよねと言って、聞いたことないけど作ったら美味しかったよ、というものを調理するからどんどん知らなかったような美味しいものができます。

瀬戸内海の島なんかでは今、昔と同じ藻塩という甘藻を一緒に炊き込んだ少し茶色い塩をまた作り始めていますけれども、「あまのもしおのつなでかなしも」という百人一首があるくらいで万葉集の時代からやっているようなものですけれども、やはり海の塩はそうやって作ると美味しくてお刺身に付けても良いし漬け物に使っても美味しいしということで皆でまた盛り上がっています。瀬戸内海の本に出ている事例で言うと、この頃綿を育てる人がいるんですが、瀬戸内海の島は実は綿の産地でした。なので倉敷のジーンズや今治のタオル等綿製品が多いんです。実は瀬戸内海で作っていた。それが海外産に負けるからということで全然作らなくなって、耕作放棄地ばかりだと言っていたんですが、綿を育てると島一面真っ白になってそれだけでもう楽しくなってしまって、皆でそれを作っているそうです。そしてこの頃はまた楽しみを増やしている人がいまして、綿は結構、実は連作障害がでるということで、何かを一緒に植えないといけないということで、ライ麦を一緒に植えたりして、先に大きくなって風よけになって連作障害を防げてライ麦はライ麦で使えますということで、今ライ麦で地ビールだという話になっています。そういう回転でものが語られ出すとどんどん楽しくなって、そこにまた参加しようという人も加わっていって、そこを後ろから後押しするような行政であったりという順番になればどんどん楽しくなるし、アイディアも生まれるという。

里山資本主義をやっている日本で1番高齢化が進んでいる島と言われていた山口の周防大島という島に、神山町と同じように転入者が多くなって、ほぼ転入者と転出者がイコールになっているそうですけれども、次々とそこにこんなことできないかあんなことできないかというようなアイディアが生まれていって、一番の中心はみかんの島といって、みかんだけではなかなか食べていけないと言っていたんだけれども、それをジャムにして、それも手作りで、できるだけ手作業でやって美味しいジャムにするというのが、もう瀬戸内海中のパン屋さんと一緒にやりたいと言っているんですけれども、その仲間でオイルサーディン始めた人がいるんですね。瀬戸内海に小ぶりのイワシがいまして、昔はそれをいりこ（じゃこ）にしてというのが産業だったんですが、少し大きくなるといりこにならないからと言って捨てていたというんですね。それがある時、なぜ捨てるのかとそれをオイルサーディンにしたらノルウェーの美味しさと比べものにならないくらい美味しいというような話になったりですね。ですからこちら向きの回転になるかどうかなんですね。過疎というと必ず逆回転でそれを押しとどめるですとか、歯を食いしばって悲惨な顔して言うんですが、こちら向きにどこかで前向きな回転になると必ず皆楽しそうになるし、美味しいもの大会になりますね。美味しい物があるのは、どう考えても都会ではなく地方の方が近いところにあるわけですから、その地元にあるわけですから、それが強みにならなくて何を強みにするんですかという話だと思います。

【岡﨑氏】

　そうですね。私は学生を連れて、喜多方の小土山集落で各家庭に学生を数人ずつ分けてヒアリングに回らせました。そうすると農家の方が、バナナ、ポテトチップ、麦茶等々を用意してくださっている。集落の方達からすれば、自分たちは普段あまり食べないけれど、若い人にはこれが良いだろうと、とても気を使っていただいているわけです。これはさまざまなところで起きてきたわけです。今はさすがにないかも知れませんが、農家民泊でエビの天ぷらとまぐろの刺身がでてくる、それをどうやって自分たちの身近にあるものに価値があるという風に切り替えられるか、そこの切っ掛けは非常に重要ですね。藤田さんいかがでしょう。

【藤田氏】

　先ほどの話を聞いていて、私もすごく地方に行く機会が多くて、農作業しに行ったりするときにまず言われるのが、農家さんからよくこんな田舎に来たねと言われます。でも私たちからしたら、逆に新鮮な場所なんですね。普段東京にいて、田んぼを見てみると空と緑しかない、視界の中に空と緑しかないということはまずない状況で、下手したら都内にいたら上を見たら高速道路が走っていて空も見えないし、農家さんからしたらよくこんな田舎に来たねというけれど私たちからしたらすごく新鮮で面白い場所に来たという感覚なので、いたら分からないことは周りから意見を聞いたりすることも大切なんだろうと思いました。

中には、私昔爪がすごく長かったんですよ。長かったんですが、折れたら仕方ないという体で農業をさせていただいていたのですが、その時に、ある野菜の種を蒔くときに、一回穴を開けてから種を取ってそこに埋めなければいけないという作業があったんですが、爪が長いと、爪の上に種を乗せてそのまま刺して植えられるんです。そうしたら農家さんはその長い爪は初めてうらやましいと思ったという話をしていて、そういった部分でコミュニケーションを取ったときに、お互い知らないことをお互い知らない観点で話し合えるということは大事だと思いました。

さらに農業高校生の子達が全国から決勝の時には来るんですが、その子達に東京に来たらどこに行きたいかとかオススメの場所を教えて下さいとか何を食べたら良いか教えてくださいと言われた時に、実際オススメはないなと、東京に来てこれを食べたら美味しいというものがなく、やはり地方から美味しいものが集まっては来ているんですが、だとしたら、東京に初めて上陸したハワイのパンケーキとか日本のものではなくまた違うものしか東京でオススメできるものはないなということは、地方の子達からしたらすごくびっくりしているようで、東京と言えば何でもあるし美味しいものも沢山あると言うけれど、やはり素材の美味しさ等は自分たちの地元が一番美味しいと思うと言うと、自分の地元に生まれて幸せですというような話をしていたりするので、違った目線や視点で見ないと分からないことも沢山あると思うので、私は、若いうちから、そういう高校生が、うまいもん甲子園は全国から集まるので、そういった子達のコミュニケーションや交流をつくることによって刺激をし合えるようなことができたら良いなと思いながら活動をしています。

イベントも地方でもやっていますが、農業高校生の子達はジャムばかり作っていて、ジャム売っているんですよ文化祭で。「楽しいの？」と聞くと「いや、あるから作るんです」と言っていて、もう少しやりがいのある、おもしろがれるようなことをやって、若い子の斬新なアイディアを古き良き農業とコラボして新しいものをつくれるようなことができたら良いのではないかと思います。

【岡﨑氏】

　藤田さんのお話、井上さんのお話で共通するのは、何か外との繋がり、新しい価値観、外のカルチャーといったものを入れてみるのも大切だということですね。私は只見町の明和地区にお邪魔していたとき、地元の皆さんから「あんたら天気の良いときに来るから、青い空と緑の畑でいいというけど、一度、冬に来てみろ」と言われた。そこで今年2月に行きました。そうしたら、普通の集落で生活しているところで3メートル30の積雪でした。帰りは只見線が止まって帰れなくなって大変でしたが、そういったこともありますでしょ？

【藤田氏】

　あります。でも最初の田植えが雨でしたので、農家の皆さんこれも農業だと言うのですが、初めての子達からしたらチーンという風になりながらやりました。あとは農家さんの所に行くにも、そこにいなきゃいけないなと思ったのは、やはり雪や交通の便で行けなくなるときがあるので、行けなくなっても作物は待ってくれないということ等を考えると、やはり地元でその場所にいてよく目をかけられる所で関わらなければならないのだろうということはすごく思いました。

【岡﨑氏】

　ありがとうございました。

関さんは、この今始まっている地方創生というものを“本丸”にいてどう見ていらっしゃいますか？

【関氏】

　落城しないように頑張ろうと思っておりますけれども。大きな意味での地方創生という大上段に構えては私もあまりよく分かりませんが、大南さん、井上さんが仰ったように行政がお膳立てしているのはおかしいんだよと、我事なんだよと、私もそう思います。特に農業というのは特殊な産業とは言いませんけれども何かあれば農水省が悪い、農政何とかしろと、米価が下がれば何とかしろと、何とかするとかではなく需給バランスを見れば余るし受けないんだし、常にそういうもののどおりというものがありますが、こと農業というのは守られるべきだとか大切だから何だかんだと言いますが、大切ならば大切さを自分で説明しなくてはならない、味わってもらった上で理解してもらった上で国民的コンセンサスの上で守れというなら分かるけれども、ただ大事だからとか主観的なことで言うことがある。だから非常に行政がお膳立てするというのはおかしくて、我事と考えて動くことというのは、これから地方創生に関わるこれからの農業そのものに大事なことなんだと私はすごく感銘を受けましたし、私もそのように改めてやります。

そして井上さんが仰ったように、自分が楽しむことが最終的には大事なんだろうと思います。やはり今後人口減少で社会がどんどん小さくなっていくと私なんかは地元で10年くらい生活していますが、毎年お葬式は5，6件、結婚式はまだ2回くらいしか行っていません。明らかに減っています。そして毎年顕著に田んぼや畑が耕作放棄されていくのが目に見える。だから10年後あの一体がこうなってということが分かって我事なんですよね。だからこれは本当に待ったなしだけれども、何か大義名分掲げてやっても売れないもの作ってもしょうがないので、じゃあどうしようと考えたときに、自分がまず楽しむことなんだよと。なので地元の方々と耕作放棄地に無理して田んぼなんてやっても分からないのだからぶどうでも植えてワインでも作るかと。そして本当は商売に手を出したらそういう商品はいけないんだけれども、自分が売る前に食べるんだよ、飲むんだよと、それが美味しい、楽しいから消費者の方にお裾分けしますよと。それがやはり我々の原動力だし農村の本当の豊かさというのは美味しいものは間近にあるし自分で作れてしまうことなんです。そこにもう一度立ち戻って、満足で終わらせることなく昔の方々の知恵を入れて、山の資源を使ってお金ではない経済を動かす努力をしていかないと、それを分かる人が段々高齢化でいなくなってしまうので、私は今40代ですが、当時を知る方は60過ぎ70代前後なので今引き継いでいかないと、私たちが次の世代に残せないんですよね。まずそこに立ち返って、古き良き日本の再現はできないけれども引き継ぐ準備をしつつ、それを自分で楽しみながら、人口減少だ過疎だと密かに語らずに、楽しみながら。こういうことを言うと怒られるかもしれませんが、人口減少ということは今まで使えなかった優良農地が使えるんだと、10年前私は耕作放棄地を開墾して農業を始めました。でも今は優良農地が空いているんですそもそも。だからそろそろ借りられる時代が来たなと。10年我慢して自分の番が来ると、あまり言うと怒られるんですが、そういう発想とともに、楽しみながら、そして何よりも自分の地域は自分で作っていくんだという、行政にお膳立てしてもらわないという意気込みでやっていって、県の方市の方には失礼だけれども行政の方々はそういう取り組みを後押ししてくれれば良いです資金的な面で。あとは法律の規制を緩めていただいて。訳の分からない法律の規制が沢山あって農地は自由に使えないしお酒は個人では作れないし、とんでもない規制が沢山あるのでああいうのは全部撤廃してもらって、自由にやっていきたいと思います。

そして私はいつも思うんですが、先輩がやってきたことと同じ事を繰り返したら同じ結果になってしまう。それ以上に人口が減っているのだからそれ以上にもっと悪い結果になってしまうのは明白なので、今こそ今までのやり方でないやり方を新しい仕組みを作る気持ちでぶつかっていくチャンスだし、やらないといけないと思うので、行政の方も発想転換をして、前例がないということは言わないで前例は作るものだということでやっていただけると本当の意味での地方創生になるのかなと私は思っております。

【岡﨑氏】

　どうもありがとうございました。それでは残された時間で、この福島県でどういう可能性があるのかということを、関さんは県内の二本松にいらっしゃいますが、他の三名は外の目から見て、日本全国の中で福島という位置づけを捉えながらお話をしていただこうと思います。

【井上氏】

　私は会津若松におりまして、先ほどは木のエネルギーとＣＬＴの見学会を開かれたということですけれども、私の次のテーマでもあるなと思っておりますが、21世紀の後半から22世紀は地下資源の時代から地上資源の時代が始まるぞと、そのうちの一つは会津から始まると私は思っております。私たちがよく取材をしている岡山の真庭の人達の一番の盟友は会津の人達だそうですごく頼もしいタッグを組んでいるらしいですが、真庭では今年7月頃に本格稼働のまちの人達が出資して作る1万キロワットアワーの大きな木の発電所が完全稼働し始めました。銘建工業という製材所がやっていたところの一番良いものを使って、そこのことを一番やってきた方がが所長さんで入っているので、今もう始まって1ヶ月なのに96％くらいのエネルギー効率でやっていると。そしてこの木の発電所で確か真庭の人口分くらいは電気まかなえるようになるらしいです。それをやって、しかも温水なんかをやっていくと、今オーストリアのものすごい自給率をやっているという国の背中に手が届くくらいにならないかとか、エネルギー自給率が5割とか6割を超えていくという、夢のある話だと思いませんか。エネルギーは外から持ってくるものなんだよ、石油は日本にはないから輸入するんだよと、そういったものを使って発電するんだよという地下資源の時代は、しかし考えてみればたかだか100年か200年くらいしかやっていなくて、それ以外の期間は人類は地上資源でやっていたわけですから、これで後の技術・科学が進歩した時代に、これからあと地上資源の時代に戻らざるを得ないですよね。しかも地下資源を使い続けると気候変動を含め人類にむしろ未来がないので、そう考えると、日本はものすごい木の資源、地上資源の優良国ですね。こんなに使っていない国はないそうですよ。

その上でもう一つ申し上げると、側の木くずを発電や熱エネルギーにするという事と同時に真ん中にある製材できる木をきっちり使おうじゃないかと。そして今会津を含め日本中が取り組み始めようとしているＣＬＴという互い違いに製材を組み合わせて建てると、7階建て8階建ての木のビルディングが鉄筋コンクリート、鉄骨を使わずに建てられるということはヨーロッパでは常識でどんどんやっているわけですから、それは日本がやらない手はないですよねと。この技術立国がそこに向かってヨーロッパやアメリカに負けるはずがないですよね、ということを今会津の人達は実は言い始めて実践を始めようとしているところなので、これは信じてやるしかないですよねと。その先に地方発日本全体に巻き込む産業ができるということは、私は間違いないと思っておりまして、だからあとは言い訳してないでやるかどうかです。山の斜面で木を切るのは大変なんだとか林道がないとできませんとか、やれない理由ばかり言っていますが、私がいつも取材をさせていただいている真庭の中島さんというオーストリアやフィンランドの最先端技術をいつも学んでいる人からすると、ヨーロッパでは斜面からものすごい効率で木を切り出す技術はもう確立していますと。導入しながら日本で改良を加えてやれば良いという段階になると言っていますので、ぜひやっていただきたいですし、私もそれを取材していきたいと思っています。

【岡﨑氏】

　福島にはそういう可能性もあるといことですね。岩手県遠野市は馬の里で、日本の本土で軍馬を生産していた一大馬産地でした。現在、若い人達が馬搬、ホースロギングという、馬を使って山から木を切り出すということをやっています。その方が、重機を山に入れて木の根っこを痛めつけたり、大きな林道を作るより、山に優しい木材生産ができるという取り組みです。実はオーストリア、ドイツなどはそういった馬と最先端の機器をハイブリッドで組み合わせるということで、すごく進んでいるのだそうです。そういうことを考えていくと、色々と可能性が広がっていくと思います。

それでは藤田さん次お願いします。

【藤田氏】

　私は実は福島は福島でもいわきの方なんですが、かれこれ5年くらいラジオ番組を毎月第3金曜日にやっていて、生放送なので毎月行っているのですが、そのコーナーの中で、いわきは海の幸も山の幸もあって良いところだということで、色々な生産者の方のインタビューをしています。そのコーナーを作ってから早3年くらい経ちましたが、それでも毎月あるんですよ。なので私はこんなに沢山気持ちを持って作っている生産者がいるんだということを、東京から見ていても色々な部分でプライド持ってやっている人達はいるだろうけれども、そういったところは世の中の人に伝えて行くべきだと思ったりもしているので、可能性は沢山あるなと思う中で、やはり私は若者の応援ということをテーマにやっているので、今年のうまいもん甲子園の応募でも335チームの応募が来ました。そして1チーム3人なので千人以上の子達が地元を盛り上げたいとか、中には自分たちの力を試したいという子達がいるということなので、そういった子達を応援していけたら良いなと思っています。中でも、そういった子達のためになるのは、学校外での体験というものは、学校を卒業して社会に出るときに役に立つなと思いました。学生達の中には、東京に来てこんな仕事があるんだとかこんな会社があるんですねということを、うまいもん甲子園に協力してくれている会社さんと触れあうことでこんなことも仕事になるんですねということを言っているので、確かに私も高校の時を思い返してみると何になりたいということはまず世の中を社会を知らないから、これがしたいという選択肢がなかったんですよ。どんなものが世の中にあるのか分からなかったので。だから自分の中で少し興味のある美容系なのかなと思っていたくらいなので、学生のうちに色々な学校外での体験をして自分の中での経験値を増やして、自分の中での将来の選択肢を増やしていってほしいなとすごく思うのと、今日ここに来て下さっている方は年上の方が多いと思うので、そういったことを応援するのが大人の役割ではないかというのを今自分がやっていて思っていて、頭ごなしにこれやりなさいというだけではなく、若い子達にやってほしいイベントではなく若い子達がやりたいことを応援できるような環境をぜひ大人が作ってほしいということは思っています。

【岡﨑氏】

　ありがとうございました。若い人、特に高校生までは意外と地域とは離れた生活実態ですね。だから藤田さんのような試みを通じて地域の資源や特産品、食材を結びつけるということは重要だと思います。

【藤田氏】

　全国から集まるので、北海道から沖縄まで決勝大会の子達が集まると、高校3年生の子達が多く、そうすると北海道の子が、卒業旅行で沖縄に行きたいからその時に案内してね等とつながりやネットワークも今すごく多いので、そういった所で友達が全国に出来て嬉しいという話もあり、高校生まではなかなか普通の生活をしていると学校以外での体験はないんですね。早いうちに経験することに損はないと私は思っていたので、早いうちから自分の選択肢を増やして欲しいと思いました。

【岡﨑氏】

　ありがとうございました。では大南さんからお願いします。

【大南氏】

　最近新聞に地方版の総合戦略の策定が始まり、「○○町では・・・」と要約が載るようになりました。例えば「定住のための仕事づくりは重要だ」、「地域に誇りを持つ子供たちを育てる必要がある」等の意見が出されたといった記事をよく目にします。こんな議論の中から新しい戦略が生まれるのでしょうか。今までどおりですよね。単に問題提起に終わるのではなく、具体策を考えていかなければならないと思います。先ほど藤田さんからお話があったように、きっかけ作り、入り口作りが非常に重要になると思います。そして、まず一つ農業で言えば、私は5月20日前後くらいにアメリカのポートランドに行ってきました。ポートランド市開発局に勤務されている山崎満弘さんと面談する機会に恵まれました。いろいろな話題の中で印象に残った話がありました。ポートランドで育った子供たちが高校を卒業し、9月の新学期から全米の大学に散っていきます。彼らが12月のクリスマス休暇に帰ってくると皆が同じ言葉を発するらしいのです。「よそのご飯はおいしくない。」と。これすごいなと思いました。ポートランドは何十年も前から地産地消を進め、地域で採れたオーガニック農産物を毎日どこかしらで開かれているファーマーズマーケットで流通するような仕組みを作り上げていたわけです。その蓄積が、子供たちに誇りをもたらしているのだと思います。これが本当の地域に対する誇りですよね。これを転じて言えば、これから神山でも提案しようと考えているのですが、とにかく色々な局面で、福島で生産された農産物をもとびきり腕のいいシェフたちの協力を得て、地域のおじいちゃんもおばちゃんもお母さんもお父さんも、そして子供たちも地域ぐるみで一丸となって美味しい福島の料理を食べよう、食べさせようとレベルを上げていけば、何十年か後には福島の大きな誇りを作り上げる事になると思います。今日本の農業で一番問題なのは、一級品を地域で流通させずに築地に持っていくことだと思います。先ほどの井上さんの話にもあったように、イタリアはそうではないですよね。全て一番美味しい物は地域でしか食べられないわけですよね。ＮＨＫの食べ歩きの番組を見ていたら、ナポリでジェノベーゼというパスタを食べていました。ジェノベーゼというのはジェノバ風です。そこでこれジェノバ風だから、ジェノバから伝えられたということですよねと質問すると、これはナポリのパスタだよ。ジェノバの奴らが俺たちの真似しているのだと言うのです。これくらいしたたかに、自分たちの地域には一級品があるんだという誇りを持つ必要があるのではないかと思います。

もう一つは、やはり私はサテライトオフィスの誘致を進めているので、その展開をぜひ福島でも進めていただきたいと思います。その時に、3つのパターンがあると思います。徳島の例で言えば、一番目は自生型です。神山で起こったことです。自然発生的に、結果としてサテライトオフィスが生まれてきたという形。徳島県美波町は、Ｕターン型です。町出身のＩＴベンチャーの人が自分の町に最初はサテライトオフィスを置いて、最終的に本社も移転させ、その人のネットワークで次々とＩＴベンチャー企業の人を集め、7社ほどが集積してきているパターンです。もう一つは、Ｉターン型です。徳島県に視察に訪れた企業が、神山町でも美波町でもない別の場所、徳島県の三好市にＩターンで入って来て、それがひとつのベースになって5社ほどが集積しています。そこで福島でおすすめしたいのは、まずはUターン型だと思います。福島県あるいは会津出身のＩＴベンチャー起業家は必ずいます。先ずはその人達に声をかけて、仮にその人自身が福島に会津に帰って来れなかったとしても、知人のネットワークでまず入って来てもらい、それを核にして、徐々に膨らませていくという方法が非常に有効だと思います。一度Uターン型ができれば今度それを見せる場ができる訳です。そこに視察ツアーでＩＴベンチャーを呼び込みながら、福島での可能性を見せていく必要があると思います。今月7日、総務省の「ふるさとテレワーク推進のための地域実証事業」において、15件の委託先に決まり、会津若松スマートシティ推進事業も選ばれています。今年度中にこの仕組みを作り上げて、幸運なことにアクセンチュアさんが会津若松には入ってきているので、アクセンチュアさんのネットワークもうまく活用しながら、来年の今頃からは集積していく作業に進んでいってもらえれば、かなりの可能性があるのではないかと思います。以上です。

【岡﨑氏】

　ありがとうございました。では最後に関さん、お願いします。

【関氏】

　福島県は、有機農業の先輩に聞くと農産物で言うと南限と北限があるというんですね。そして冬は結構寒いので、害虫や病原が越冬できずに、有機農業はやりやすいというお話を何回も伺いました。さらにある学者さんが言うには、西日本より東日本、東北の方が里山にいる生物の種の数が倍とは行かないまでも豊かなんだということを伺ったことがあります。なのでそれをしっかり活かすためには、特に福島は原発事故があり放射能を測って安心安全を言うのであれば、このままいっそのこと有機農業に転換して、極端にまで走って有機農業を売りにして勝負するとともに、やはり今里山の除染がされていないから使うな、ではなく使える方向にして、その恵みをしっかり我々が使えるようにして楽しんで、温故知新で昔の方々の薪を使う炭を使う生活をちゃんと自分たちで体感して楽しんで、それを外部の方々にアピールしていく、美味しい物食べて里山の恵みを食べて、生活もすごくエコロジーでこんなに豊かなことはないだろうと、本当の豊かさはそんなに遠くにあるものではなく足下にあるので、それをやはり住んでいる人が体現して体感して、それを実感するから人に良いんだよと言えるので、やはりそこを軸に外部の方、先ほど言ったように“サテライトファーム”でも良いですが、入って頂いて、皆で楽しんでいく福島県になれば風評被害なんてものはなくなるんだろうと思います。逆に福島だからできるということを期待しているし、私もそうしていきたいと思っております。

【岡﨑氏】

　ありがとうございました。福島に対するご提言をいただきました。

地方創生に関しては、そのモデルとしてよく大南さんの神山町でのＩＴ関連企業の進出、或いは井上さんが取材されているバイオマス関連等が事例としてよく出てきています。それはそれでこれからの日本を支えていく意味では大切なことです。それと同時に、地方創生に関してもっと考えていただきたいのは、目下の自分たちの地域の課題がどこにあるのか、それをどう解決するということです。

特に福島県の奥会津では、例えば只見町の集落レベルでは3.3メートルの積雪があります。このことはお年寄りの冬の暮らしやセーフティネットにも関わることです。雪が溶けたら忘れてしまうのではなく、日本のようなハイテク先進国で、なぜそれに対応する仕組みが生まれないのか。最近の新しい家は取り入れられている場合もありますが、只見町の集落の民家は150～200年も経た昔の宮大工が作った文化財のような古民家が沢山あり、それが毎年の雪の重みで段々危機的な状況になっている。日本全体の宝でもあるわけです。そういったものを日本の将来のストックとしてどう活用するのか、それに対するハイテクの開発や、雪とともに暮すライフスタイルの創出、提言なども、地域の課題を解決するという視点から、この地方創生で取り組むことが必要だと思います。

もう一点は、集落からの視点ということ

ではないかと思います。冒頭に井上さんが出してくださった高知県の県際収支のスライドがありました。農林水産業では黒字、燃料や食品は赤字になっているというもこれも県レベルで見るとそうなるわけですが、高知県民は通常はそれほど感じない。県際収支ということは自分の日常生活とはかけ離れているのです。しかしこのことを集落という視点からみてみると、大きく感覚は変わってくる。

例えば同じ高知県の四万十市旧西土佐村の大宮地区です。ここでは住民がお金を出し合って600万円で株式会社大宮産業を作り、JAが経営を辞めたガソリンスタンドとミニスーパーを買い取って引き継いでいます。高知でもこの地区は雪が降りますので、灯油を販売するGSはまさにお年寄りのセーフティネットを何とか集落で維持しようとしています。地道な経営で5、600万円の黒字を出しています。しかし5、600万円稼いでも、それ以上に沢山のお金が外へ出て行っているのではないかという話になった。それをどう少なくするか、止めるかということが重要です。

集落レベルで見て一番お金が出ているのはお葬式です。この集落は約300人、高齢化率は47％ですので、毎年10名くらいが亡くなる。そのお葬式は50キロほど南の旧中村市のJAのセレモニーホールでやる。一回当たり100万から150万円、ということは年間1，000から1，500万円が集落外へ出ている訳です。それに加えて亡くなった方と最も親しかった人たちがそんな遠くまでお参りに行けないという問題もある。集落の中でやれば30万円で十分執り行うことができるということ計算もできています。

人口問題にしても経済的な出入りにしても、もっと細かい視点できちんと積み上げて自分たちの問題として取り組んでいく、それを市町村や県へと拡大していくという指向が重要ではないかと考えています。

それでは後半のパネルディスカッションをこれで終了したいと思います。パネリストの皆さんどうもありがとうございました。

【司会】

　ありがとうございました。これを持ちまして「地方創生フォーラムin福島」を終了させていただきます。ご参加ありがとうございました。